
五男？……四男じゃなかったっけ？

杉花粉撲滅委員

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

五男？……四男じゃなかったつけ？

【Nコード】

N9219W

【作者名】

杉花粉撲滅委員

【あらすじ】

普通の現代人が、戦国時代に飛ばされました。転生先は周りに流され、主体が無い武将・織田（津田）源三郎勝長。コヤツの行動によってどんなバタフライ効果が生じるかは作者も判りません。

1：転生箇所については、数多の作品で胃もたれする程にパターン化されているため、割愛♪

2：処女作のため、生暖かい目で見て下さい。

第一話 東美濃の安寧〜南船北馬〜

■天正9年（1581年）11月

訳が判らん。周りに流される人生なんて、もう御免だ。

気が付いたら和服美人のおっぱいを吸っていた所までは良かった。ホントに良かった、このままこの生活が続けば……、今でもそう思う。

俺は生まれてすぐ物心ついた時には遠山なんていう家に養子に出されていた。よく判らんが『美濃の豪族（遠山一族）を取り込むためには止むを得ん』と周りの大人が言っているのが、当時は聞こえた。

暫くして直ぐにその当主であり養父の岩村城主・遠山景任が死んで、やっと俺の時代だと思ったら養母（おつやの方って言うらしい）が城代となった。まあここまでは許そう、ウン。俺、元服してないしね、まだ。

しかしこの養母がどおしようもない阿呆だった。何をとち狂ったか知らんが、あろう事が侵略してきた敵将の秋山信友って野郎と結婚しやがった。

今思えば、ここから俺の人生が変わった。

「この色ボケ婆あ！、この恨み晴らさでおくべきか〜！」

■元龜2年（1571年）12月

「今日から此处で暮らすのじゃ、良いな」

俺に命令するコイツ。名前を諏訪四郎勝頼というらしい。らしいと言うのも、本人は『武田』勝頼と名乗るのだが、周りの家臣（？）がみんな『諏訪殿』と呼んでいるから……見下されてるな、コ奴。

武田家に拉致られて1ヶ月。俺は今、甲斐の躑躅ヶ崎館に居る。今日から甲斐府中での人質暮らしが始まる。何が原因となるか判らるので、取り敢えず猫を被って生活しよう、ウン。何時の時代も何事も安全第一は世界標準のはず……。

「父上様、早く助けに来て下さいねえ」

■元龜3年（1572年）1月

俺にも友達と呼べる奴が出来た。

まずは武王丸。俺より2歳年下だが前当主で祖父の武田徳栄軒信玄からのご指名により、もう武田家の次期当主が内定している。そんな訳で、今日も周りの大人達からいろんな圧力を浴びせられている……可哀想な奴だ。

コイツの母親が遠山家の出（我が父上の養女）のため、俺とは義理の従兄弟な訳で……。どういう訳か俺に懐いてくるんだな、これが。

周りの大人は『人質風情（俺の事らしい……いつかぶっ飛ばす！）と友誼を結ぶなど慮外の沙汰ですぞ』と注意するらしいのだが、本人は気にせず俺に近づいてくる。まあ最近では満更でもない俺が居

る。

次に源三郎。武藤喜兵衛昌幸という武田家の外様家臣の長男なのだが、武田家への奉公のため昌幸とともにこの甲斐府中で生活している。

コイツは俺より1歳年下だが体格は俺とさほど変わらるので、よく相撲をして遊んでいる。まだ小さい武王丸じゃあ相手にならんし、下手に次期武田家当主を怪我でもさせると俺達の首が飛ぶ。だから本気で遊べるのはどうしても源三郎となる、楽しいな。

「武王丸様あ、源三郎あゝ。今度は鬼ごっこしよあゝ」

■元龜3年（1572年） 1月

俺の預かり知らぬ所で世界は動く。俺は今、信濃伊那の高遠城に向かっている。そして今月より武田勝頼様（諏訪性で接すると鉄拳が飛んでくるので、今後は武田性と呼ばせて頂きます、はい）の弟・仁科薩摩守盛信殿のもとで生活することとなった。

原因は判っている。武田勝頼様を周りの大人達が見下すのが無性に腹が立ったので、その筆頭の穴山玄蕃頭信君と木曾伊予守義昌に対して、

「家臣が主家を蔑ろにするとは何事です、徳栄軒様（信玄のこと）が今の貴殿たちを見たらどうお嘆きになるとお思いか、親族筆頭とも云える御二人が物の分別が付かぬとは何事ですか！」

と罵倒したからだ。そして、公衆の面前で子供に恥を掻かされた二人が俺を切り捨てようとした所を盛信殿が仲裁し助けてくれたからだ。

俺の言い分を聞いてくれ！ この一年、衣食住を無償で与えてくれて、尚且つ読み書きまで習わしてくれた勝頼様に俺は恩義を感じている今日この頃。更に、家中で一致団結するべきときに足を引っ張る奴が大嫌いなのだ、俺が。

そんな訳で、「人質風情が！、無駄飯の分際で誰に物申すか！」と息巻く穴山と木曾に対し、「私が此処に居る事で美濃方面から敵が攻めてこないのです。それに貴方に衣食の面倒を見てもらった覚えは無い」という俺、という構図ができてしまった。

冷静に考えると明らかに此方の分が悪い。刀を持った大人二人と素手の子供一人。このままいけば俺の命は本日終了、これから始まるであろう（？）俺の武勇伝も史実通り何も無し……だった。

しかしそこに現れ出たのが盛信殿だった。

「両者の言い分は尤も。この小僧（俺の事）は拙者がきつく言い含めるのでこの場は我が顔を立てて頂きたい」

やはり出来る男は違うね、カッコいい。さすが信玄公の子息だけはある、ウン。傍系のくせに威張り散らすだけしか能が無い馬鹿共とは違う。

勝頼様張りの鉄拳と半刻の説教の後、

「まあ、お前が兄上を慕ってくれておる事は判っておる。今後その気持ちを忘れないでいてくれ。それにワシも身内とはいえ腹を据えかねておった故な、ハハハッ」

てな具合に『キリッ』とキメる若武者、盛信様。

「盛信様あ、俺は一生貴方に付いて行きますう」

第二話 甲斐の虎く有為転変く（その1）

■元龜3年（1572年） 4月

この日は朝から盛信様と城の縁側で将棋を指していた。

「のお御坊」 パチっ

「何でしょう？」 パチっ

「そなたが甲信の地を統べるならば、如何する？」 パチっ

「考えた事がございませんでお答え出来かねます」 パチっ

「ならば今考えよ」 パチっ

「そんな、殺生なあゝ」 パチっ

「…で、どうする」 パチっ

「ハアゝゝゝ、あくまで仮定でございますが」

「ふむふむ」

「碁石金に頼らぬ国作りをしたいと存じます」

「ほお」

「まずは織物。絹・麻・綿などの紡績を興します」 パチっ

「今すぐは無理じゃなあ」

「はい、ただ無理だと諦めていては何事も始まりません。武田家と誼のある京の商人辺りに頼んで職人を寄越して貰い、産業を根付かせれば良いかと」

「成程、5年から10年で何とか成るかも知れぬな」 パチっ

「はい、次に軍事でございますが」 パチっ

「ふむ」

「これまた武田家と誼のある本願寺辺りを介して根来衆から鉄砲を購入します」

「その資金は？」

「今から話そうと思っていたのですが……当地では硫黄が取れます。

これを輸出すればどうでしょう」

「販路は？」

「駿河の港がございます」

「ふむ」 パチっ

「火薬についても根来衆からご教授されれば宜しいかと。因みに原料の硝石は厠の下から取れるそうです」 パチっ

「成程」 パチっ

「資金が足りぬようでしたら、紡績以外にも良質な木材や紙を信濃から、茶を駿河から輸出しては如何でしょう」

「ふむふむ」

「これにより10年後には碁石金に頼らずに甲信の富国が成ると思うのですが……」 パチっ

「うむ、良いことを聞いた。早速来月の評定で御館様と兄上に奏上するでしょう！」

「……少しはご自分で考えてみては……」

「ハハハッ、何を言うか。内から見えぬ事も外からなら見えると言うでは無いか」

「聞いた事がありませんが」 パチっ

「今、儂が考えたからのお」

「………あのお、王手にございます」

「なぬう、…そこは待ってくらぬか」

「待ちませぬ（ピシヤリ）」

ドタドタッ

「殿お、一大事に御座います」

俺が今日の将棋はもうお開きとばかりに駒を片付けていると、急使が盛信様のもとに駆け込んだ。

「何やら使いが来たようです、今日はお開きとしましょう」

「うむ。（これで御坊とは3勝8敗2分か……童と思うて最初は手加減したが、この童やりおるわい。しかし次こそは…勝つ！」

「如何した、そのように慌てて！」

「はッ、実は……」

ほのぼのとした時は続かぬもの。大変な報せが武田家に舞い込んだ。

西上作戦の陣中で当主の信玄公が病没したらしい。

おかしい。史実では西上作戦も信玄公の死も元亀4年（1573年）のはずだ。

もしかして、俺の所為？ えっでもまだ何もして無いはずだけど、
これってバタフライ効果なんだろうか……。

第三話 甲斐の虎く有為転変く（その2）

■元龜3年（1572年） 5月

軍制が甲斐・躑躅ヶ崎館に帰ってきた。俺も盛信様に「共をせよ」と言われ、急遽駆け付けた訳だが…、皆鎮痛な面持ちだ。流石の盛信様も青ざめている。

そしてこの窮地を脱したいというのだろう、次第に喧騒へと移った。

「如何する！」

「如何も何も、御館様のご遺言通りにするしか無かるうが！」

「しかしっ！」

吼える小山田越前守信茂を馬場美濃守信春が抑える。ただ馬場自身も怒りの矛先を何処にぶつければ良いのか判らない苛立ちを隠せずにいる。

「御館様のご遺命に従い、武王丸改め信勝を第20代当主とする。そして僭越ながら儂が陣代となる」

上座の城代が座る場所から勝寄り勝頼様が大声で、且つ落ち着いた声で皆に宣言する。

だがこれを聞いて反論の声が一部から沸きあがった。

「何を勝手に。幾ら亡き御館様のご遺命でもこの急場を元服前の童に何が出来ようか！ 承服しかねる」

「そうだ。我等親族衆に断りも無しに勝手に決められては困りますぞ！」

またかというか、やはり此处でも穴山信君と木曾義昌が仲良く吼える。

「黙らっしゃい！これは武田家の諸事であり、幾ら親族衆でも他家は他家。そなた等の承諾は勿論の事、干渉は不要じゃ。それに四面を敵に囲まれている当家、直ぐにでも体制を立て直さねばならぬ時に寝言を吼えてる場合か！この戯けい」

よつ長老様。流石信玄公の実弟であり一族の重鎮、武田刑部少輔信廉が場を質す。そして、武王丸を当主の座に座られて以後の説明を始める。

「ささつ、先ずは武王丸殿、元服の儀を行おうか。その後は……まあ追って進めるかのお」

当主の座に座った武王丸がコクリと頷き、一同に背を向けて御旗・楯無に向けて宣言する。

そして腹に一物在ろうとも家臣一同、平伏して復唱するのだった。

「御旗・楯無も御照覧あれ」

「御旗・楯無も御照覧あれ」

（あれ？ 遺命って3年間喪に服すなつてのじゃなかったっけ？）

■元龜3年（1572年） 6月

体制は整った。まあ主だった武將が亡くなった訳ではなく、勝ち戦の最中に当主が急死したっただけだから。

信勝の当主襲名もつつがなく終わった。終わったのは良いのだが……。

「何をほざくか！ 領地替えなぞ断じて許さぬ」

「だから何度も申している通り、これからの武田家には金銭が要る。そして金の産出が落ち碁石金が粗悪に成れば直ぐに立ち行かなくなる。そうなる前に事を始めねばと言っておる」

毎日毎日良く飽きずに言い争えるよなあ。今日も朝から穴山信君と盛信様が言い争い、その周りを一門衆、親族衆、譜代衆、外様衆といった武田家臣団が苦渋の表情で侍っている。

穴山曰く「何で我等の領地を勝手に差し替えられねばならぬ。当領地は我等は勿論、先祖の働きにより切り取り守ってきたもので。勝手は許さぬ」

盛信様曰く「何も領地替えをして石高を下げようと言っているのではない。物流と産業を促進して武田家を盛り返さねば他家に立ち行かぬと申しているだけだ」

先日俺が進言した案に肉付けしたものを奏上した盛信様だったが、家臣団、特に親族衆の穴山・小山田・木曾が噛み付く事、噛み付く事。そして今日は穴山信君が盛信様の相手となっているのだ。

「ここまで一部の者からのみ不満や異論が挙がっているが、他の者達はどうか」

場の空気が停滞したのを見計らって、一族の重鎮の一人、一条上野介信龍が座を見渡しながら一同に問い掛ける。

うん、重鎮とか長老とかいう人は伊達に歳取ってないね、主導権を握るのがお上手。

ここで下座の方、外様の一角から発言の許しを得ようと手が挙がった。武藤喜兵衛昌幸だった。

「あのう、盛信様は何も武田家だけが潤おうと言っているのでは無いと思います。それに穴山殿の領地駿河は武田家が今川から奪った領地で穴山家一家だけの領地では無いと思いまする」

「外様風情が何をほざく。そなた等は黙っておれい」

「お言葉ですが、この難局を乗り切るに親族も外様もありません。すべてが武田家家臣にございます」

「何お！」

「よう言った真田、正にその通り。『目から鱗』とはこの事じゃ、皆の者、我等一丸となり強き国を築こうではないか」

穴山が言葉に窮した所に間髪入れず、我等が御当主様である信勝が甲高い声で満場に向けて宣言する。

その横で勝頼様が『ウンウン』って漢字に満面の笑みで頷いていた、………この親馬鹿。

（あゝあゝ、穴山、小山田、木曾の3羽鳥（3馬鹿…ププっ）の不満が頂点に達して額に血管浮き上がらせてるよ。……どおなんだろうね、全く）

第四話 甲斐の虎く有為転变く（その3）（前書き）

毎度毎度、駄文ですいません。

第四話 甲斐の虎く有為転変く（その3）

■天正2年（1574年） 6月

史実で云う『長篠の戦い』が起こった。これまた史実より1年早いよ（涙目）。

何で予定通りに皆さん動かないの？ 俺何もやってないよ？ もしかして……昔武王丸と相撲した時チョツと本気出したて泣かしたからですか？ でもあれは武王丸がトロい訳で……。許して下さい神様、マジで。

前哨戦の長篠城攻城戦までの推移は史実通りだった。しかし設楽ヶ原での戦いが違うんだ。

正確には両軍の設楽ヶ原での布陣までは史実通りだったが、武田勢の進撃が違う。

史実では、馬鹿みたいに正面突破を試みて玉碎したはずなのに、何処かの馬鹿が

『態々敵が待ち受けている正面から攻めるのは愚の骨頂。此処は陣城の側面がから空きでござれば、両翼より討ち入るのが宜しいかと』などと勝頼様に進言しやがった。

お陰で織田・徳川勢は大慌て。急いで側面を槍隊で固めたのだが、鉄砲3段撃ちで対応したのは織田勢のみ。

まあ徳川勢が3段撃ちを習得していなかったのもあるけど……。

終わってみれば、織田勢に攻め込んだ軍勢は痛手を与えつつもこち

らも3段撃ちにより手痛い逆撃を受けて撤退。それを受けて優勢に徳川勢を蹴散らしていた軍勢も撤退を余儀なくされた。一言で言えば『得る物は何も無しの両軍傷み分け』って所かな。

今回は前回の西上作戦と違って織田勢に痛めつけられて傷付いた者も大勢いたので、彼らからの無言の圧力がツパ無い。

「父上様あゝ、早く助けに来て下さい。マジ周りの目が痛いです」

■天正2年（1574年） 7月

長篠の戦いの詳細が判ってきた。

まず勝頼様に進言した何処かの馬鹿だが、真田一徳斎幸隆だった。この爺様、何をトチ狂ったのか『最後のご奉公だと思い、此度の戦に連れてって、……ゲホゲホ』とか言って、参戦したのだ。幸隆が生存していたのは史実通りなんだが、戦自体が1年早まったため参戦可能となった訳だ。

流石、老いたとは云え山本勘介と並び称される武田家の智将、織田・徳川連合の陣形から狙いを看破した事で武田家の惨敗を防ぎおった。

うゝん、史実ではこの戦で被害甚大、再起不能となったのを悟った武田勝頼が俺を織田家に返してくれるはずなんだけど……爺い余計なことをしおって、孫と縁側で遊んでろよ。

戦が終わったと同時に死なれちゃ、文句も言えん！ 代わりに自分の事のように自慢してくる源三郎をフルボッコ確定！

次に戦死者だが、織田勢に攻め入った部隊からは木曾義昌と駒井右京亮政直のみだった。

その代わりと言っては何だが、馬場・山県・真田兄弟など史実では死んでいた奴らは死ななかった。この辺りは日頃の行ないを神様が見ていたって事にしておこう、俺の所為じゃないはずだ多分！

織田・徳川側だが、織田の諸將に戦死者は無く徳川の榊原式部大輔康政を始め、内藤豊前守信成、松平玄蕃允清宗、酒井雅楽頭重忠、高力河内守清長、牧野右馬允康成が亡くなった。徳川としては散々の負け戦と言って良いだろう。因みに榊原が死んじゃったら徳川四天王ってどうなるの？

■天正5年（1577年） 1月

この年、我が親父様である織田信長が雑賀衆への攻略を本格的に開始した。

そして俺は、『他国の事は〴〵思慮の外』 自国の事は蚊帳の外』』などと歌っていられなくなった。

俺も12歳となり、多少の国事は把握出来るようになってきたが、まさか遠い畿内の争いが武田家に影響するとは露にも思わなかった訳で…………。

「ええい、根来衆からの鉄砲はどうなったのじゃ！」

「……、何分彼の地での戦が激化しておりますれば、商いを担当している者の言によりますれば『それ所ではござらぬ、其れよりも武田家の再西上作戦のご予定は？』と返された次第でして……」

「ここは他の地より鉄砲・大砲の販路を開拓してみては……」
「根来・雑賀以外に何処が鉄砲を売るといふのじゃ！」

最近、陣代の勝頼様がイラついている。そしてその勝頼様を宥める役が盛信様と重鎮・信廉殿な訳で……。

（他の家臣の皆さん、もう少し盛信様や信廉殿を助けてやろうよ、身内なんだしさあ）

そしてその不満の原因の関係者（俺は預かり知らんだけど……）の俺は、評定に参加している。全く持つて居心地の悪い事この上ない。

何で元服もしてない12歳の無垢な童（俺の事）が評定に出ているかというと、

「鉄砲購入の案を出したのお前だろ？　だったら結果がどうなるか気にならんか？」

という盛信様の有難くも無い一言があつたからだ。

後で聞いた話では、勝頼様が

「この進言の責任者は盛信、そなたであろう！」

と問い詰めた所、盛信様が

「いえいえ、某はある者の案を代弁したまでで……」

と切り替えし（逃げやがった）、

「ではその進言した者を此処に連れて参れ！」

と言い放つたのが事の経緯らしい。

『らしい』というのは、源三郎が『親父に聞いたのだが』という前置きを付けて近況を教えてくれたからだ。

で、今日、俺はその評定が開始するや否や、開口一番勝頼様から有難くもない罵声を喰らつたのだが、

「童の戯言を真に受けて勝頼様へ進言されたのは誰でございましょう。（盛信様をジトおと睨むのは忘れてません）……因みにその時金銀の工面についても戯言を申したはずですが」という俺の返答により、可愛い童（俺の事）に責任を転嫁させた事で勝頼様の倍増された怒りを一身に盛信様が受ける事となった。

まあ、新興の絹・麻・綿などの紡績、改善した良質な木材や紙、更に駿河の茶と魚介の輸出により金銭の工面に苦勞せぬようになり始めたし、その進言の原案を出したのが俺なものだから、鉄砲の購入が滞っている原因が織田に起因すると言っても全面的に俺に怒りをぶつけられるのは筋違いだね、盛信様」。

第五話 武蔵の黄旗と金城湯池（その1）

■天正5年（1577年） 9月

この時代にも寺子屋のようなものはある。武田家の次代を担う諸将の子息を寺に集めて教育する訳だが……………

「だからそうではないと言っておろつ」

「……………（もう一度境内の掃除をやるのお、面倒臭いなあ）」

「ああもう、何遍言わせるのじゃ、そこは乾拭きで行なうのじゃ」

「……………（初めて聞きましたけど！、ていうか他の皆さんは水拭きしてますよ）」

「フンっ、やはり織田の子倅だな。口ばかり達者で中身が伴っておらぬわ」

「……………（もう何もしたくない、これは明らかに苛めだ）」

快心の糞坊主めえ、俺の親父が嫌いで美濃から逃げてきたのを俺に八つ当たりしおつてえ！『心頭滅却すれば火もまた涼し』だったか、何時かその坊主頭でジングスカン焼いてやる！

■天正5年（1577年）10月

今日俺は12歳にして元服した。普通は15歳の年始めに元服するのだが『信勝様が元服していて、年上の御坊丸や源三郎が未だ元服していないのも変じゃ』と上からのお達しというかがあったためだ。（この季節の元服って……………絶対思いつきだ、この糞暑い最中に正装する身にもなってくれ）

『勝』の字はわざわざ勝頼様から頂き、名を織田源三郎勝長と改めた。

盛信様曰く「上の字を賜るのは大変名誉な事だ。有難く思えよ」との事だ。

そして通称の『源三郎』だが我が親父様の子息は『三』の字を名に入れる慣わしがあるという表向きの言い訳をしつつ、面倒臭いので同時に元服して武藤伊豆守信幸と改めた相棒の幼名を貰った。

……ところで、敵の織田姓を名乗って良いんだろうか、この前織田と戦したばかりの武田家家中は肩身が狭いんですが。

■天正6年（1578年） 1月

我が悪友の信幸が従妹で真田信綱殿の娘を娶ることになった。相手はまだ10歳になってない。ロリだ！ 犯罪だ！ 俺も嫁が欲しい！ 今なら正室の座が空いてまっせえ！

この時代には従兄妹通しの結婚はそれ程珍しくは無いけどさあ。まだ許婚までらしいが早過ぎるだろお、……羨ましくない、絶対認めんぞ。

■天正6年（1578年） 3月

上杉謙信が急死し『御館の乱』が勃発した。上杉家の景勝と景虎の家督争いにより、長年の北条・上杉間の越相同盟が破綻した。

景虎派を煽っているのは遠山康光という人物らしいが……義母と言いコヤツと言い如何して遠山の人間は碌な事をしないのかねえ、ハア。

まあ、ここまでは特に武田家に影響は無い。このまま他家の事はほっとけば良かったんだよ、北条の要請も適当にあしらってさ。

しかし我等が陣代様・勝頼様は違った。北条家の要請を受けて越後に攻め入ったはずの武田家が、あろう事が景勝側と和睦し、更に信玄六女の菊姫を上杉家に輿入れさせたのだ。

これに激怒した北条家が武田家との同盟を一方的に破棄してきた。

昨日の敵は今日の友とは云え、もう少し節度をもって行動しましよ
うよ、勝頼様あ。北条家が憤怒するのも当たり前です！

■天正6年（1578年） 6月

昨年から武田家でも取り入れた『兵農分離』が功を奏し、武田家は農耕期を気にせず何時でも兵を挙げる事が出来るようになった。

事は鉄砲の購入が滞った事が起因している。

「金銭はあるのに鉄砲が無いとは……何のために産業を興したのか分からぬ」

（産業が盛んになって民が潤えば、税收が増えて皆さんニコニコ、平和で良いじゃないですか）

相変わらずの勝頼様、どうやら戦が遣りたいようだ。そんな空気を察する事の出来る男・盛信様が俺に、『金銭を兵に替える方法を考えよ』と言って来た。

ホント武田家には困った人が多い。戦には強いが頭が伴っていないのだ。

そんな訳で俺は今日も武田家一の知患者と呼ばれつつあり、我が心の友・信幸の親父と相談している。

「……武田家の血筋にも困ったものです。誰も彼も自分勝手に……」
「まあそう言うな。何も今に始まった事ではない。それに皆の頭が良ければ我等のように槍働きが苦手な者の働き場が無くなるというものぞ」

二人で駿河産のしぶ茶をズズウツとすすりながら、考える事一刻。ふと昌幸殿が聞いてきた。

「そういえば、そなたの実家織田も昔から戦好きよのお」

「…熱田を始め三河湾や伊勢湾の港から得られる税収があります故、実入りは良いようです」

「ふむ。近年は年中戦をしておるようじゃが、農繁期はどのようにしておるのか。何か知っておるか？」

「兵農分離なる仕組みを取り入れ、兵を雇う事で農夫と兵を分けているようです」

「それじゃ！ そなたその仕組みを詳しく知っておるか」

「いやあ流石にそこまでは……」

「……左様か」

光明が見えたと思ったが、直ぐにカクツと聞こえてきそうな程に首を落として落胆する昌幸殿。

「その仕組みを取り入れられればと思うたが、まあ仕方が無い。一から兵を雇うしかないと素直に勝頼様に進言しよう」

「そうですね、これまで戦働きの経験者を優先しつつ、農家の次男三男を中心に集めれば数だけは整いましょう」

「うむ、急に兵だけ増えても練兵もあるが、何より武具が不足しては戦もできぬでな。鎧や刀の購入も進めるよう添えておこう」

頭の良い人は違うね、話の先を読むから話が早い！ まじめで愚直

な我が親友・信幸も何時かこうなるのかなあ。

■天正6年（1578年）10月

「エイッ！ ヤーッ！ エイッ！ ヤーッ！」

稲の刈り入れ時だと甲斐府中では連日雇い入れた兵の練兵が続いている。

今回武田家で取り入れた『兵農分離』により、これまで戦の度に各家で召集していた兵が不要になり、農家の皆さんも安心して田畑を愛でている。

そして、ここ躑躅ヶ崎館では飽きる事無く評定をしている。

「して勝頼殿、もう暫くすれば軍勢を動かせそうだが、此度は何処を攻めるのじゃ」

最近元気な長老様・信廉殿が勝頼様に語り掛けると、既にその答えを用意していた感の勝頼様が宣言した。

「敵は北条じゃ！ 一方的に盟を反故にするなど言語道断。上野一円の併呑だけに及ばず、武蔵まで攻め入ってやろうぞ！」

（同盟を破棄されるきっかけを作ったのはアンタでしょうが……まったく。何度でも言わせて貰います、北条家が憤怒するのも当たり前です！）

第六話 武蔵の黄旗と金城湯池（その2）

■天正6年（1578年）11月

俺の初陣は武田家の上野攻略となった。

（あれ？ 史実では織田家の武田殲滅戦じゃなかったっけ？ まあいい、もう深く考えるのは止めよう）

ここまでは順調に勝ち進んでいる。武田は信濃勢1万2千を率いて上野・箕輪城に押し入ると、まず兵を分けて北の沼田城を奪い、続け様に岩櫃城、厩橋城、桐生城、館林城と落としていった。

流石は勝頼様、平時と違って戦場では惚れそうになるぐらいカッコいい。この頃には他の上野諸家も武田家に従属を申し出ており当初の兵に加え、2万の兵が武田家の軍勢にまで膨れ上がっていた。

（この1万は良く言って張子の虎、悪く言えば烏合の衆だから、前方で誠意を見せてもらいつつ、実戦訓練で頑張って貰いましょう）

対する北条もやつと軍勢を整え鉢形城（現 埼玉県大里郡寄居町）に1万5千の兵を揃えた。また後方の川越城（現 埼玉県川越市）に8千、岩槻城（現 埼玉県さいたま市岩槻区）に9千の兵を入れて武田家の侵攻に備えた。

「ええい、武田の奴輩め！ 一度ならず二度までも我等北条を舐めくさりおつて！」

「そうじゃ！ この鉢形城にて氏邦様が蹴散らしてくれるわ」

北条陸奥守氏照と北条安房守氏邦の兄弟が鉢形城の本曲輪（本丸）で、今や遅しと武田勢を待ち構えていた。特に鉢形城城主の氏邦は主将の任を担っているためか戦意が高い。氏邦よりも年長故か若干落着いた趣の氏照が答える。

「現状、武田勢はどこまで攻め入っておるのか、兄者はご存知か！

？」

「先程斥候からの知らせが参ったのだが、箕輪城（現 群馬県高崎市）におけるそうじゃ」

「ええい、目と鼻の先ではないか、待ち遠しいのお。しかし何故兄上（氏政）は我等を上野まで攻め込ませず、この地で迎え撃てと言うたのじゃ」

「何でも武田の奴輩は2万の軍勢まで膨れ上がっておるとか。なれば兵糧に不安が出るのを待ち、奴等の限界が来る此の地で決戦すれば勝利は必定との事じゃ」

「成程、流石は兄上じゃ。伊達に関八州の雄、北条の太守よ！」

さて、攻め立てる武田勢だが……………。

「鉢形城は北条の北関東支配の拠点、兵も大勢詰め掛けていよう。喜兵衛え、如何程の数が場内におけるか？」

「はっ、1万5千にございます」

箕輪城の城内は上野攻略の成功で高揚している。そんな中、今回軍監に任命されても普段通り平静な武藤昌幸が即答した。

「ふむ、予想の範疇じゃ。御坊、兵站は如何なっておる！」

次に今回兵站奉行に任じられた勝長に陣代の勝頼が問い掛けた。因みに勝長と同様に今回初陣の信勝が総大将として箕輪城の城主の座に座っている。

「……あのお、某は既に元服を済ませ、勝頼様より『勝』の字を頂き勝長という立派な名があるのですが」

「はははっ、長年使い慣れた名というのは愛着もあるう！」

「…………（駄目だ、話が噛み合わない）」

「して兵站は如何じゃ？」

「すべて滞りなく。勝頼様より潤沢な金銀を与えて頂いた事で駿河と越後の商人より兵2万が3月は食うに困らぬ量の米を用意出来ております」

「重畳じゃ」

「半月以内に武蔵の北半分を奪い、一月で武蔵全土まで手を伸ばし、半月で甲斐に帰ればお釣りが出るわ！」

「……普通の国が2つ丸々入る広さの武蔵を一月半で奪おうとは、無謀と言つか豪儀と言つか……何か策でも在るのかなあ。まあ今回は兵站奉行だし後方で戦を観戦させて貰おう。」

■天正6年（1578年）12月

「何故我等が兵糧攻めを受けねば成らぬ！ 本来の策と逆ではないか！」

「攻城には守勢の3倍から5倍の兵が要るとは兵法の基本じゃが、まさか米まで兵に変えるとは……」

「つい二月程前に刈り入れたばかりというに……武田が攻め込んできてから未だ一月ぞっ！」

「……軍勢を多く場内に入れ過ぎたのが間違いじゃった。本来此の城には3千の兵が限度、3倍の兵が詰めればおのずと米の消費も早まると言うものじゃ」

「では小田原からの援軍は！？ 既に三度も使いを出したはず！」

「……未だだ」

「……ええい、これなら最初から城で待たずに野戦に持ち込んだ方が良かったのじゃ、其れを兄上が臆病風に吹かれた所為で……」

「……」

「兄者、今からでも遅くは無い。城外に打って出て武田の奴輩めを

攻め滅ぼそう！」

「……相手は2万、此方は1万5千ぞ。負けるとは言わぬが、勝ちを拾うのも難しかろう、何せ相手はあの武田勝頼じゃ」

「ええい、兄者まで臆病になりおつて！ もうよいわ、儂一人でも打つて出るぞ」

「待たぬか！ そなた一人の浅慮で大勢の北条勢を犠牲にするかっ！」

「うッ……ではどうするといふのじゃ」

「……城からは打つて出る。しかし武田勢には攻め込まず、川越城まで引く」

「それでは此の城は……」

「断腸の思いかもしれぬが、……捨てる！」
「くッ……」

「半月程余計に掛かったが、兵を無為に失う事無く城一つを落とすは重畳じゃ」

「有難き幸せに存じます」

鉢形城の本曲輪にて昌幸殿を褒める総大将の信勝。

（総大将ってカッコいいな、俺も何時か成れるかなあ……まあ弱虫の信勝でも成れたんだし、きつと成れるさ）

鉢形城から打つて出た北条勢1万5千も兵糧攻めと武田勢からの追撃と落ち武者刈りにより、6千まで兵を減らしながらも川越城に下がった。

しかし、武田勢の攻勢は留まる事はなく、次の標的に向けて着々と進軍していた。

第七話 武蔵の黄旗と金城湯池（その3）

■天正6年（1578年）12月

上野から武蔵北部に渡って進軍する信濃勢とは別に進軍する軍勢がいた。甲斐勢1万が東に進み八王子城（現 東京都八王子市）に攻め入ったのである。

「信濃勢は上野を落とし、既に武蔵北部の鉢形城を攻めておると聞く。我等も遅れる事無く八王子城を攻め落とすぞ！」

「ははっ」「」

仁科盛信の檄に呼応し、兵達の士気が揚がる。

「美濃守（馬場信春）、八王子城の様子はどうなっておるか!？」

「はっ、城主の北条陸奥守氏照は鉢形城へ援軍に出ており、八王子城内は寡兵との事。此方は二の丸まで攻め入っておりますればあと一息で落ちると存ずる」

「よう判った、では参るか！」

盛信が馬場に城内の様子を聞き、必勝を確信した。そして最後の一押しとして全軍の突撃を開始するのであった。

「ぎゃあー」

「う、氏照様はまだ戻られぬか!？」

「殿も鉢形城で奮戦しておられ、此方に直ぐに戻る事は出来ぬかと」

「……左様か、ならばこれまで。此処に残った兵で最後の徒花を散らしてやるのではないか！」

「「おおっ!!!」「」

必死を覚悟した北条勢が最後の突貫を試みるが多勢に無勢、城主不在の八王子城は僅か2日で落城するのであった。

■天正6年（1578年） 1月

北条上総介綱成が岩槻城に布陣した。

「武田勢は潮の如く此の武蔵を攻め入っており。悔しいが武田の力は本物じゃ、成ればこそ此处より先には進ませては成らぬ」

「ははっ」

「なあと、儼も北条2代氏綱様の代から戦ばかりしてきたでな、多少は考えがあるので安心せい」

流石は歴戦の猛者である。士気の下がっている兵を安心させるのはお手の物である。

「さて、信玄の子倅はどう来るか。短慮者かそれとも……」

■天正6年（1578年） 1月

上野から南下した武田勢は士気の低い川越城を落とし、現在は岩槻城を攻めていた。

「ふむ、北条勢は野戦を望むか」

「そのようでございますね」

元荒川の対岸に布陣した武田勢の陣から北条勢の布陣を確かめながら、勝頼様と俺が会話していた。

「して、兵糧の方は如何か？」

「投降した兵の数が予想より多かった事もあり、もって後半月程かと……」

「……そうか、ならばここまでじゃな」

「流石は地黄八幡（北条綱成のこと）、老いても歴戦の勇者である。これまでの弱将とは異なりよく兵を統率し、攻めては引き、引いては攻める。付け入る隙が無いとは此の事じゃ。兵糧も心許なくなってきた故、今回は此处で手仕舞いとする」

陣屋に戻り評定を開くと勝頼様は開口一番、宣言した。仕方が無い武田勢は綱成一人にこの半月の間翻弄され続けたのだから。

「して、その後は如何なされますか？」

最近武田家の軍師の感がある昌幸殿が先を促した。

「うむ、上野は信廉殿を主将に内藤昌豊、昌月親子、保科正直、横田尹松をつけ兵も8千を駐屯させるとして、この武蔵は盛信を主将として馬場信春、信頼兄弟、土屋昌統、小幡昌盛、武藤昌幸に任せらる」

「ははっ」

「信濃勢は引き上げるが甲斐勢はそのまま武蔵に残す。綱成は手強いが安易に攻め入らず、北条から此の地を守れ」

「はっ」

「皆、ご苦勞であつた。此の後も気を緩めず諸事に力を注いで欲しい」

「ははっ」

戦後の分担が決まると信勝が戦の終結を宣言し、諸將の勞を労うのであつた。

こうして、秋から始まった北条攻めは一旦幕を下ろすのであつた。

（はあく、やっと戦が終わった。正直、後方でも人の生き死にを間近で見たときは流石にビビった。関東は風が乾いて痛いし、早く甲斐に帰って暖かいほうとうでも食いたいなあ）

■天正7年（1579年） 1月

年も明けて新年。我が兄・織田三位中将信忠殿と武田家の松姫様の婚儀の日取りが決まった。

流石に武田侮り難しと考えたのか、ウチの父ちゃんが武田家に使者を遣わした。

（松姫様、良かったね。史実では適わぬ恋に生き、未婚のまま尼僧になったんだもん）

そんな訳で、何でか知らんけど表向き松姫様の露払い、裏テーマとして人質解放ということで、俺も安土に同行することになった。

……同行するのは良いのだが、なんで木曾義春と一緒に付いてくる、何で？

事の発端は長篠の戦いで親父の木曾義昌が戦死した事が始まりだ。

普通なら長男が早世しているので嫡男の義春が家督を継いで一件落着くのはずだった。

だがこの世にはトチ狂った女が大勢いるらしい。生まれただかりの3男で赤子の岩松丸（後の木曾義利）を当主にする真竜院（真理姫のこと）が騒ぎ出した。

家臣の家督相続は主家が認めるものだから、最初、勝頼様も怒って「義春もそなたの子ぞ！ 少しは義春の気持ちも考えよ！」

と説き伏せようとしたのだが、結局、妹とはいえ流石は武田信玄の娘、気の強い事この上無い訳で……勝頼様が負けた。

（北条に勝った勝頼様を負かすなんて……強いにも程があるだろ！）

ってことで、宙ブラりんの義春の世話をこれまた何でか知らんが俺が見る事になったというか、またまた盛信様に押し付けられた。

そして今日、松姫様と共に安土に向かう訳だが、体面を気にするウチの父ちゃんが、

「今まで御坊を人質にとっていたのだから、今度は武田家の番だ」と言い張った。

当初は勝頼様は、

「松を嫁に出すのだから、人質は不要！」

とつつ撥ねたのだが、

「武田の2倍の国力を持つ織田を今怒らせるは、下策」

との家臣団からの勧めもあり、しぶしぶ了承した。そんな訳で宙ブラりんの義春に白羽の矢が当たったという訳だ。

（義春も大変だなあ。まあ俺も武田家には恩義があるし、義春が寂しく無いように可愛がってやるかあ）

第七話 武蔵の黄旗―金城湯池―（その3）（後書き）

戦の場面は上手く書けませんでしたので、端折りました。
もう少し北条綱成をカッコよく書ければとも思ったのですが……。
以後、精進します。

第八話 近江の霸王、金科玉条（その1）

■天正7年（1579年） 2月

我が兄・信忠殿と武田家の松姫様の婚礼の儀も無事に終わり、俺は尾張の片田舎・犬山に居る。

尾張に赴く前に上様（我が父・信長のこと、こう言わないと怒るらしい。でも基本は『親父様』が気に入っている）から、

「既に元服は武田で済ませているそうだな。なれば、俺からは城と領地を与えよう」

（あれ？ 信房って名前くれないの？ ……さては面倒臭いのを嫌がったな）

今まで苦勞させていた事を気にしているのかな、親父様は俺に犬山3万石の領地を下賜してきた。やったね、これで俺も晴れて一城の主だ。頑張っちゃうもんね」

そんな訳で義春を連れて（何で付いてくるの？ 人質は安土に居なくてまずくない？）、犬山に来た……のは良いのだけど。

「殿、領主就任おめでとうございます」

「おめでとうございます」

つてな具合に、新しく俺の家臣になった人たちからの就任の儀や何やら、更に領内の豪農やら豪商からの拝謁の儀や何やらが続き、正直うんざりしている。

（はあ、義春が羨ましそうに俺を見ているよ。何なら変わってやるのか？）

■天正7年（1579年） 5月

「安土の天主が出来た。見に来い」
と親父から書状が来た。……正直、領内の政が忙しいのであまり行きたくない。

まだ14歳の少年で更に政の初心者。何かと思える事も多く、また隠し田の取り締まりにはどうしても現地に行かねばならず、商人からの税収に齟齬が無いと数字と睨めっこをしなければならず……やる事が目白押しだな、領主って。

かと言って、織田家の頂点に君臨する我がお父様の命令は聞かなければならず、しぶしぶ安土まで行ってみれば、城番の人から

「但し身内とは云えども見物料は頂く事が決まりでして……」
と言われ、仕様が無いので泣け無しのお小遣いから見物料（入城料）を払って、親父に会いに城内に入ることになった。

（義春を始め共の者の分を加えると結構な額になった、……親父、
どんだけガメてんだ！）

城内の謁見の間に通されて暫く待っていると、

ダンっダンっダンっ！（誰だあ？ 大きな足音立ててえ！ 行儀
が悪いなあ）

我が親父様が足早に謁見の間に入ってきた。

「御坊っ！ 息災かつ！」

「はっ、此度はお招き頂き有難う御座います」

「うむ」

（久しぶりの親子の対面だぞ！ もっと喋れよ！）

「それにしても流石は上様、他に類を見ない絢爛豪華な天主でございますね」

「うむ」

(……だからさあ)

「時に昨年、上様は右大臣・右大將を辞任されたとか、……次を見越しての事と存じますが、此の後は如何な国造りをなさるお積りでしょうか？」

「……そなたなら如何する？」

「私ですか？……そうですね、私なら朝廷には祭事のみを担当させ、寺社と公家にはその補佐をさせますね。煩い人たちに煩わされたくありませんから……」

「ふむ」

「そして武家が政事と軍事を担当する、そのような国造りをしてみたいと存じます」

「……成程の、そなたは他の兄弟とは少し違うようじゃ」

「はあ？」

「今日は有意義であつた、また参れ」

親父との会談は速効で終了ということかな。高い謁見料を払って会いに来たので普通は『もう少しお話しましょ』と言いたいところだが逆に早く終わってくれて助かった。ああ無口だと話題の提供に疲れるね、全く。

安土の天主を出て、改めて天主を見て改めて思う……こんなデカイ建物建てて、耐震構造は大丈夫なんだろうか？

■天正7年（1579年） 7月

平和だ。誠にもって良い事なのだが、……暇だ、退屈で死んでしま
う。

寧日、政治（主に書類の承認と家臣からのお話を聞く事）ばかりし
ていて、此の所、城外に出てないなあ。

最近、領内に出来た商店でカステラを出し始めたと聞く。俺も食べ
たいなあ、それも現地で！

■天正7年（1579年） 9月

なんと！ 聞いて驚け！ 俺も結婚することになった！

相手は亡き浅井備前守長政と我が叔母・お市の方との長女・茶々で
ある。

源三ろ……ゴホンっゴホン、信幸と同じで従兄妹通しの結婚になる。
まあそれはどうでも良い。

まだ10歳だが、母親に似て美人らしいし……ぐふふふっ、楽
しみだ。今は叔父上（信包殿）の安濃津城（現 三重県津市）に居
るみたいだし、お忍びでお顔を見に行っちゃおうかなあ。

イカン、義春が此方を見ている。鼻の下が伸びているのがバレてし
まう。義春には『カッコいいお兄さん』であり続けねばっ！

第九話 近江の霸王、金科玉条（その2）

■天正7年（1579年）11月

目出度く茶々との婚礼の儀が終わった。まだ相手が10歳と幼いので夜の営みはもう少し後という事だが、まあ暫くは我慢我慢！

茶々といえ、本来は婚礼の儀が終わるまでお互い一言も話すのは厳禁なのに、

「勝長殿は、我が父、浅井備前守長政をどう思われますか！」

とか、何か怒ってるばい言い方で問い掛けてきた。

此方としても前世で『聞かれた事はきちんと答えを返すこと』と躰けられてきたため、少し考えた後に

「うん」愚将とか劣将ではないな、少なくとも。ただ、忠と義、または恩と盟と言った方が良いかな、その選択を誤ったというところかな。ただ此の戦国の世で事の正誤がどう転ぶかは神のみぞ知るところであれば、長政殿の選択を誹謗することは俺には出来んよ」と答えた。

（何を聞きたかったんだろう。よく判らんが何か奥の方で聞いていた女中がハラハラしていた……ような気がする、ここは茶々にだけ注目して他は無視だ！）

「有難う御座います。この茶々、幾ら伯父上からの命で結婚するとは云え、実父の名を貶めるような方と結ばれるは嫌で御座いましたので……。勝長様が誠の男で良う御座いました」

（これって合格ってこと？ それにしても勝気な子だなあ）

「うん、これからは夫婦となり一生を共にするのだから、思う事は何事も話し合っていこう」

これにより、晴れて俺達は夫婦だ。目出度し♪目出度し♪ 茶々が大人になったら子作りに励もう！

■天正7年（1579年）12月

他国の状況が伝わってきた。

まずは東国の武田家だが、信勝と信幸からの文によると常陸の佐竹と盟約を結び、更に安房の里見を北条から寝返らせたようだ。

それにより、北条の領地を三方から攻め入ったことで遠国佐竹が下総を、里見が上総を北条から奪ったようだ。そして武田は武蔵を完全に支配する事が出来たようだ。

これによって、北条は相模・伊豆の2カ国となった訳だが……、四代続いた家柄だけに武田に服従するには難しいかな。

次に徳川家だが、長篠の戦いからの傷も癒えたとはいえ、西に織田、北と東を武田に抑えられている訳だから身動きが取れない状態だ。巷では律義者との風聞が流れているが、史実の通りならば腹に二物も三物も隠している希代の謀略家だからなあ。そろそろきつと動き出す頃だろう、というのが俺の推測だ。

最後に上杉家だが、御館の乱から一段落したが血で血を洗う内乱のため、上杉氏の軍事力の衰退は否定しようがなく、外からは柴田勝家率いる織田北陸方面勢が攻め、内からは家臣で北越後の新発田重家が造反して身動きが取れない状態になった。此処で武田家との誼を通じて織田との停戦を働きかけているのが現状だ。

次に西国だが、羽柴筑前守秀吉率いる中国方面勢が播磨の三木城を

包囲している。別所勢は寡兵での籠城となつてゐるらしいから長期化しているようだが、史実では来年早々に開城されるだろう。

そして本願寺攻めだが、此方もそろそろ佳境に入つており、本願寺第十一世顕如と親父様の間で和議の詰めが進んでいるようだ。まあ和議といつても内実は大坂退城で本願寺側の負けといふところだろう。

うん、紀伊の根来・雑賀ももう一息だし、後は四国の長宗我部と九州の島津・龍造寺・大友をサクツと片付けて、その頃には東国を統一しているはずの武田と手を結べれば……、『泰平の世よ！ こんにちは』ですね。良いんじゃないですか、良いんじゃないあ！

まあ、最近、何か俺の知らない所で皆さん頑張つてゐるみたいだし。早く平和に暮らそうよ、一回の人生なんだしさ、……普通はね。

■天正8年（1580年） 1月

最近、俺は自分規範というか指針というか理念について考えている。

夫婦仲良く子作りに励んで、今まで経験してこなかった分、賑やかな家族団らんを味わいたい。

戦とか血みどろの乱世は早く終わつて欲しい。

そして史実と違い、天寿を全うして一生を終えたい。

第一の家庭については、いたって良好。円満な『おままごと夫婦』を満喫している。後2、3年して子供が出来れば言う事無しって感じかな。

ただ、茶々と義春の歳が近い所為か、最近あの二人の仲が怪しい。
(後で義春を軽くシメておこう！)

次にこの乱世についてだが、どうなるんだろうね、全く。

ため息が出る位に戦端が広がっているように思えるんだけど……、
ウチの親父様が天下統一して大丈夫だろうか？ 先行きが不安で仕
様が無い。

かと言って、種薄の秀吉さんでは一代限りだし、ドケチの家康さん
じゃ閉塞感全開の世の中だし……、何か考えるだけで鬱になってき
たので止めよう。

最後に天寿を全うすることだが、これは起こるかどうかわからないが、
『本能寺の変』を回避すれば、フラグを薙ぎ倒せる訳で……、光
秀えゝ余計な事すんなよ！！

そういう訳で、

『家内安全、平和一番、そして人生謳歌でナンボのモンじゃい』
うん、今月の標語はこれで行こう♪

第十話 近江の霸王、金科玉条（その3）

■天正8年（1580年） 2月

2月に入り我が親父様・信長公から安土に来るようにお呼びが掛かった。何だろう。最近特に悪い事した記憶無いんだけど……。きちんと安土城の見学料を払って、城内に、そして天主に入って暫く待つと、

ダンっダンっダンっ！（親父様のご登場♪）

「御坊、息災かつ？」

「はい（勝長つて立派な名があるんですけど……自分が付けた名前じゃないから呼びたくないのかな、この意地っ張りい）」

「ふむ、此度の本願寺との和議についてだが、そなたが纏めよ！」

「（はあ？ 佐久間さん（信盛の事）はどうしたの？） 本願寺との交渉は、佐久間右衛門尉殿が朝廷のと仲介をされていると聞いておりますが」

「あの阿呆うじゃ埒が明かん！ その方代わりに纏めよ」

「左様で御座いますか、お受けさせて頂きます。（親父様、顔怖いよ。顔中の血管をピクピクさせながら怒るなよ、俺に！）」

あれ？ 佐久間信盛の放逐って8月じゃなかった？ はあ、また何処かで何かやらかしたかね、俺。茶々と云い、佐久間と云い、織田家に戻ってもバタフライ効果が発動してしまいましたよ（涙目）。

それにしても佐久間さん可哀想に。高野山に行っても仲間にして貰えず、最後は寂しい老後を過ごしたんだよね、此の人。

何時か迎えに行つてあげるからね、それまで我慢して待っててね。

■天正8年（1580年） 4月

朝廷から勸修寺晴豊殿と庭田重保殿を勅使として遣わして、漸く本願寺との和議が成立した。

「御坊、ご苦労！」

「ははっ（言葉少ないよ、もう少し労ってよ）」

俺は無事に親父様の期待に応えられたようだ。

ただ問題というか何故か本願寺一派が退去した大坂の跡地を、我が愛すべき親父様は従兄弟の津田七兵衛信澄に

「安土に負けぬ城を作れ」

って命じたのだった。

でも何で俺じゃなくて信澄殿に任せるんだろうと勝手に、ある事に気が付いた。信澄殿の幼名も俺と同じ『坊丸』だったのだ。多分（というか間違いなく）親父様は、

「大坂の城は御坊に任せる」

って近習言いやがったんだ。それを近習が俺と信澄殿を間違え、その間違いを質するのが面倒だから親父様は訂正をしなかったのだ。

まあ2ヶ月の間忙しかったから、楽できていいけどさあ。何か寂しいなあ、僕ちゃん」

■天正8年（1580年） 6月

此の日、京都で大規模な観兵式（軍事パレード）が行なわれた。俗にいう『京都御馬揃え』だ。

（史実では来年の4月にやるんだよなあ………気にしない、もう気にしない！）

運営・指揮のすべては明智日向守光秀殿が取り仕切った。

流石は光秀さん、こういつた事をやらせれば日本一！ 諸事万端、何も言う事は御座いません………4月の涼しい時期にやってくれればですが。

親父様も嬉しそうに珍しく終始ニコニコしている。

この馬揃えの目的は、天下布武を標榜する親父様が周辺大名を牽制し、力を誇示するためだと専らの噂だ。

隊列の順番も一番に丹羽長秀殿を始めとする摂州衆、若州衆、西岡の河島（革島一宣）。

二番に蜂屋頼隆殿率いる河内衆、泉衆、根来寺の内大ヶ塚、佐野衆。三番に明智光秀殿の大和・上山城衆。四番に村井貞成殿と続き、次は我等親族衆へと続いていく。

何か偉くなつたみたいで嬉しいな。でも信孝殿は『順番が………何故、三介や信包殿の後なのじゃ』と殺気を孕んでブツブツ言っている。

（遠目に見ると怖いよ、兄上）

でも親父様は、『来月もやる』とか周りに言ってるみたいだ。これは、あのニコニコ顔の裏で何か考えてるなあ、絶対。

最近、お近づきになった（領地も尾張と伊勢で近いしね）滝川彦右衛門一益の御大がボソツと教えて貰ったんだけど、正親町天皇に讓位をうながすためらしい。

正直に直球で『いい加減に、退位しろよ』って言ってやれば良いの

では、……って天皇さんに面と向かって言うのは拙いですね（僕ちやん、反省）。

それにしてもこの糞暑い初夏の最中にやらんでも良いと思いません。天皇さんや見物の公家や町人の人達が汗だくでダルそうにしていますよ、父上様。

来月もこれと同規模の馬揃えをやったら、間違いなく熱中症で倒れる人が続出します！ これは、織田の家名に恥をかく事になりますんか？

第十一話 飛驒の喜び／虚心坦懐（その1）

■天正8年（1580年） 7月

この日、俺はまた我が『洋酒の似合う男』親父様に呼び出された。呼べば喜んで駆けつけるとでも思われてるのか……、正直ウザい。どうせまた面倒臭い事を言い渡されるに決まっている。

ダンっ！ダンっ！ダンっ！ダンっ！……ドカツ！（親父様、登場）

大きな足音を奏でながら親父様が現れ、上座にドカツと座ると、おもむろに

「御坊、息災か！？」

「はっ（だから、俺はもう勝長つて名前だつて！……いい加減覚えよ）」

「本日そなたを呼んだのは他でもない。二点程そなたに申し渡す事がある」

「はっ（何だろう。とてつもなく嫌な予感が……）」

「一つは、そなた徳川殿の息女を娶れ！」

「はぁ？（今何と仰いました、父上）」

「何を呆けた声を出しておる！ 徳川殿の息女を側室にせよと申しおる！」

イヤイヤイヤイヤッ！ ムリムリムリムリッ！

そんな事したらウチの茶々が激怒します。唯でさえ俺の理想は『家内安全』ですから…。

「しかし、それがしは先頃茶々と夫婦になったばかり！ その義は

平にご容赦を！」

「成らぬ（怒）！ 既に双方で決まった事じゃ」

「…………（如何しよう、茶々が怖い！茶々が怖い！茶々が怖い！）」
「嫌とは言わせぬ。婚儀は来月。良いな！」

俺は何も言えず、平伏するしかなかった。

どうやって茶々を宥めるか（自信ありません！俺）。どうやって茶々の機嫌の良い時に言い出すか（言い出せるの？俺）。どうやって茶々に側室を認めつつ貰うか（殺されない？俺）。茶々の事はかり考えて、親父様が次の話題に入っている事に気付かなかった。
「次に戦の事だが…………、聞いておるか！」
「あつ、はい」

「戦の事だが、儂は近々西国へ参らねば成らぬ」

「…………（それが俺と如何関係するの？）」

「何でもサル（秀吉さんの事かな？）が言うには、『上様の力なくして毛利と雌雄を決するは難しく、何卒、西上願ひ奉り候』との事じゃ」

「…………（へえ、史実にそんな事合ったつけ？……………あつた！ 本能寺の変のチョツと前にそんな秀吉さんが文でお願いしてた！ これって本能寺のフラグですか！？）」

「聞いておるのか！」

「…聞いております。（俺、史実ではこれに付いて行って、二条城で殺されるんだよなあ！ ヤダっ！ヤダヤダヤダ、行きたくないっ！）」

「そこでじゃ…」

「はっ（一緒に行きたくありません！ イヤっ！イヤイヤイヤ、それ以上は何も聞きたくありませんっ！）」

「そなた、飛騨路に向かえ！」

「……………はあ？」

話がぶつ飛んだ。親父様の話を要約すると、親父様が美濃・近江にいるから飛驒の姉小路家が大人しくしているが、西国へ行ってしまうと何やら姉小路家が動き出しそうで目障りだ。だから俺に姉小路家を滅ぼし、ついでに上杉が弱っている内に越中を奪え、て事らしい。ついでに俺一人じゃ危なっかしいから滝川一益をつけてやるって言うてくれた。

あれえ？ 本能寺の変フラグじゃないの？

■天正8年（1580年） 7月

「お前様っ、御義父上様から側室を貰うように言われたとか、誠にございますか！」

人の口に戸はたてられぬとは良く言われるが……俺が犬山城について早々、茶々に問い詰められている。頼むから落ち着いて、ねっ、これじゃあ話が出来ないよ。

「お前様っ！ ……如何なのでございます！？」

「ウン……ソナコトイワレタカモ？ （可愛いお顔なのに、額に血管浮かばせて詰め寄らないで下さい）」

「……………グスッ」

「……………（あれえ？ 今度は泣いてる）」

「グスッ、お前様はいつも私だけを見てくれる。私だけを思ってくれ。そう信じておりましたのに」

「いや…見てるよ！ ……いつも思ってる！、ウン！」

「じゃあ何故ですっ？ ……もしか、もう私の事飽きたとか、そうよ、もう私の事なんで忘れてしまったのよっ！ ……今だ夜伽の出来ない私

が嫌いになったのよっ！」

「いや…そうじゃないってっ！（なんで勝手に決めつけるかなあ、そうじゃないって言ってるのに）」

この後小一時間、気が付くと直ぐに悪い方に話を決め付けようとする茶々を宥め続ける俺が居た。女の子って……。

「ふう、少し落ち着こう、ね。今回、親父様に側室を貰えって言われた時も俺一度は断ったんだよ」

「エグッ！エグッ」

「……（何か泣き方が段々汚くう…ゴホンゴホン）、でもさ、『もう両家で決めた事』って言われたもんだから、断りきれなくて…」

「ヒグッ！ヒグッ」

「でも、でもだよ。俺がこの世で一番大事に思っているのは茶々だし。これからもそれは変わらないよ」

「……ヒッグ、本当…ヒッグ…でござい…ヒッグ…ますか？」

「うん、変わらない自信がある」

その後更に小一時間、茶々が泣き止むまで頭を撫でてあげている俺が居た。……親父様、この恨み何時かお返しさせて頂きます！…つて、飛騨攻めの事まだ茶々に話してないや、もう面倒臭いなあ！

■天正8年（1580年） 8月

督との祝言が終わった。まあ俺としては二回目だから落ち着いたものだ。

本来であればこのまま督と床に就くのだが、俺はその前に茶々を呼んだ。

茶々は恥ずかしいのだろう、何やら顔を高揚させて体をモゾモゾさせて俺の前、督の横に座った。

「これから宜しく頼む。またこれからの事についてだが、そなたには悪いが俺は茶々とそなたのどちらかを取れと言われた時、正室である茶々を選ぶ」

「はい」

「茶々」

「はい」

「督には『そなたを選ぶ』というておいて何だが、俺の理想は『家内安全』だ。だから督と争わず、俺が居ぬ時は家長として我が家を纏めて欲しい」

俺の言いたい事を茶々は了承してくれた。それを踏まえ、茶々は何やら督に言いたい事があるようだ。

「はい、心得ております。時に督殿」

「はい」

「私はそなたより年下、まだ殿と閨を共にしておりません」

「……はい（ポツ）」

「ですから、時に貴女には先達としていろいろとお聞きする事があるでしょう。その時は宜しくお願いしますね」

「はい、此方こそふつつか者では御座いますが、宜しくお願い申し上げます」

どんな事を聞くつもりだ。……何か気になる。

督との初夜も無事に遣り終え、これで俺も童ていゴホンゴホン……
…一人前の『男』になった訳だ。

古今女子に狂う男が後を絶たないとは言うが、茶々と督、そして弟分の義春の前では少なくとも威厳を持った男でいたいと思う。

第十二話 飛驒の喜び／虚心坦懐（その2）

■天正8年（1580年） 8月

ついこの間まで『暇で死ぬ』とか言っていた自分に会いたい。そしてこう言ってあげよう、

「あの人使いの荒い親父様のもとに居るのだ……諦める！」

最近の俺は、昼間は飛驒・越中攻めの準備、夜は茶々のご機嫌伺い又は督との逢瀬と多忙な日々を送っている。

夜の方は望む所なのだが、昼間の飛驒・越中攻めの準備の方が問題なのだ。今日も家臣と帳面を睨めっこしながら打ち合わせをしている訳だが……。

「勝長様、当家の兵は如何程で御座いましょう？」

「そうだなあ、当家は3万石の領地を拝領しているし1千程度の兵を動員せねばならぬだろう」

「それでは動員の期間は？」

「うーん、そちらは少なくとも三ヶ月、長ければ四ヶ月といったところかなあ」

「当方の援軍は？」

「滝川殿が恐らく1万の手勢を率いてくれるようだよ。それと森武蔵守長可殿が1千5百、堀左衛門督秀政殿が同じく1千5百の手勢で来てくれるらしい」

「それらの軍勢の兵糧は……各家で用意して頂けるんですよね？」

「うーん、すまんが上様が『メシは御坊が用意する。当面の兵糧だけ持ち大急ぎで美濃に集まれ！』って無茶振りされちゃったんだよ

ねえ」

「なつ、『無茶振りされちゃったんだよねえ』じゃありませぬ。どうするのです！ 当家では1万4千もの兵の胃の腑を四ヶ月もの長期にわたり満足させるだけの米を用意出来ませんよ！」

「うん、俺もそう思つて上様に『ウチの小遣いじゃ足りないからお駄賃前借り出来ます？』つて感じの事言つたらさあ、4万貫くれたんだ。これで何とか出来んかなあ」

「なつ、それを早く言つて下さい。直ぐに尾張、美濃、伊勢の庄屋を中心に米をかき集めます」

「んゝ宜しく頼むよ。ただ、米の値が上がらぬ様に出来るだけ分散して集めてくれ」

「ははっ」

■天正8年（1580年） 9月

美濃岐阜を出発した俺達は、保木山城（現 岐阜県下呂市金山町）、宮地域（現 岐阜県下呂市宮地）と攻めて落とし、今、姉小路氏の居城・桜洞城（現 岐阜県下呂市萩原町）に来ている。

「このような端城、一当てすれば落ち申す。何卒先鋒はそれがしにつ！」

煩いよ、長可。全く戦馬鹿はこれだから困る。

「これまでの行軍で美濃方面の支城を落として参つたが、皆寡兵であつた。恐らく他の城は捨て、此处桜洞城に兵を集めていると見るべきじゃ」

流石一益殿、物事が良く見えてらっしゃる。

「なれば本城が姉小路氏の居城であれば城主、一族の逃亡を防ぐために搦め手より一隊を当てましょう。その上で本体にて大手門より攻め入りましょう」

理に適っているんだけど、頭固いなあ秀政殿。

皆の意見も言い終わった事だし、そろそろ俺の意見を行こうかな。

「一益殿の異見は尤もである。此方も全力で攻城にあたるとしよう。また秀政殿の意見だが正攻法すぎ、此方の被害が増えよう。折角上様より大筒を一基借用してきたのだ、使わぬ手はないと思う。攻城櫓と破城槌と併用すれば多少は楽に落とせよう」

「ははっ」

敢えて無視された長可殿が顔を真っ赤にして震えている。……ただでさえ怖い顔が更に厳つくなつた、もう貴方の顔見れません。でもねえ、馬鹿の相手をする暇ないのよ。

■天正8年（1580年）10月

桜洞城を落としてから飛騨各地の城を攻めて姉小路の残党を討った訳だが、流石に一月で飛騨全域の攻略はしんどかった。

「……………」

「勝長様、見事なお働きでございましたな」

「して、これからのご予定は？」

長可は明らかに此方と視線を合わせず、秀政殿が俺を誉めてくれた後、一益殿がこれからの事を聞いてきた。

「有難う御座います。上様より、『一益と共に当地に残れ』と承っております」

「左様ですか、では我等はここで引き上げさせて頂きます」

俺が今後の方針を皆に伝えたと秀政殿が頭を下げながら丁重に辞意を告げた。

「援軍忝く、書状にて上様にもよくよく報告させて頂きます」

「「ははっ」」

ふう、やっと飛騨攻略の第一段階が終わった。これからも大変だが、一益殿も居るし何とかなるだろう。

……ところで犬山3万石はどうなるんだろう？ 返却？

■天正8年（1580年）11月

俺は居城として、その立地から飛騨の中央に位置に新しく高山城（現 岐阜県高山市）を築城し、そこに居を構える事とした。そして他の全ての城は破却した。そしてその廃材を利用して高山城の築城を行なっている訳だが、今日、高山城の本丸と石垣の築城が一段落した。流石に飛騨全域の城の廃材を多く利用した事で、短期間に費用をあまりかけずに済んだ。

他の曲輪や堀、土塁などはこれからだが、取り敢えず茶々と督を呼ぶでしょう。

今日も俺は一益殿と一緒に飛騨の内政をしているのだが、報告書には時々如何わしい箇所があり、その対処に当たっている。

「勝長様、飛騨の検地が終わりましたので、結果はこれに纏めまして御座います」

「はい、確かに」

「…幾つかの国人や寺社で隠し田をしている可能性があるとの報告を受けておりますが、如何致しましょう」

「全て罰します」

「…全てで御座いますか？」

「はい、全てです。ここで甘い顔をする第二、第三の悪事が起きます。今、その種を撒く季節ではないと存じます」

「左様で御座いますか。判りました、下の者にはその様に指示して

おきます」

「宜しく願います。それから罰ですが、他の者が同じ過ちを冒さぬよう、皆の見ている前で斬首とします」

「ははっ」

滝川一益、出来る人だよなあ。この人とその家臣が残らずに俺の俺と家臣だけだったら、飛騨全域の政は勿論の事、一揆が乱発してお手上げだった事だろう。親父様の采配、久しぶりに見事です、今回の無茶振りの恨みは解消しましたよ」。

その一益殿だが、此度の褒美として有名な茶器二、三個と金銀が与えられた。領地の加増が無いから如何思っているかそれとなく聞いてみたが、

『既に上様から北伊勢5郡を拝領しており、今更新領を貰っても嬉しくは御座らん。其れよりも茶器を頂いた方が諸将との会合などに役立ちます。其れに家臣達も金銭を褒美に与えられた方が喜ぶ者達が多いですからなあ』

との事だった。成程、そういう考え方もあるのか、参考になった。

■天正8年（1580年）11月

親父様から『犬山3万石は当面はそのままとする』とのお許しを頂き、俺は飛騨一国を併せて6万8千石の大名になった。そしてやつと茶々と督が飛騨に来て、我が家も落ち着いてきた。

と思った途端、今日、とんでもない情報が舞い込んだ。

なんと徳川家が武田家に従属したのだ。そしてその証として徳川家の嫡男・信康と武田家の養女（武田信廉の娘）が結びついたのだ。（あれえ、信康って死んでたんじゃなかったんだ）

そして、『そんな話は聞いてないぞ』と激怒した我が親父様が『折角くれてやった娘（徳姫という我が異母姉）を返せ』って徳川に申し付けた。

ここで家康さんが平身低頭して『武田家からの姫は側室にしますからう』と詫びてればまだ良かったのだが、律儀に徳姫殿を返してきやがった、其れも子連れで。

これにより、織田徳川の盟約は破棄となった。

……織田と武田は同盟はしていないとはいえ、婚姻関係にあるんだよなあ。どうなるんだろうこれから、飛騨が戦場にならなければまあ良つかあ。それにしても武田家の皆は勿論の事だけど、徳川殿も何考えてるんだ？ お子ちゃまの俺にはよお判らん。

第十三話 飛驒の喜び／虚心坦懐（その3）

■天正8年（1580年）12月

徳川家から戻ってきた徳姫殿だが、傷心が祟つてこの月の初めに亡くなった。親父様の激怒っぷりも凄かった。葬儀の最中まで訳の判らんオーラが漂っており、とても厳粛とは無縁だった。

（姉上、安らかにお休み下さい）

そして、葬儀が終わって飛驒に帰ってきたのだが、何故か姉上の遺児である登久姫と熊姫が付いてきたのだった。

理由はまたもや我が『貧乏揺すり』が様になってきた『親父様である。俺はまだ新婚さんだ』というのに『子の無いそなたが養女とせよ』って言うって問答無用で去っていった。

まあその場で『そなたの所に居る徳川の娘を返せ』って言われなくて良かった、良かった。督も不安にしていたしね。

そんな訳で登久姫と熊姫を俺と茶々の養女としたのだが、問題は茶々だ、主家の葬儀に参加して香典返しに子供を二人も連れてきたら『私はまだ母となる程歳を取っておりませぬ』とか激怒するかと思いきや、歳の近い妹というか娘を養育する事になったのが嬉しいのか、毎日キヤピキヤピとはしゃいでいる。姫達がドン引つ……ゴホン、呆然としている程に、である。

（心配して損した。でも新婚なんだから、少しは俺の事も構ってくれ……構って下さい）

それに『そっち（茶々）がそうするんなら、こっちだって』って事で督とイチャイチャしようと思っても、督自身にとっても姪っ子だから何かと気になるご様子。

茶々と賢、二人揃って姫達に構ってしまってるので、……寂しいです。

■天正9年（1581年） 1月

1月だし、ここで親父様のというか織田家の近況をおさらいしておきたい。

西国の後詰に行ったのだが、理由は判らないが直ぐに戻ってきた。どうやら秀吉さんの演技で『最後の締めはお願いします』って感じで三木城はサクッと落ちたらしい。

そして山陽の羽柴勢に対して信雄殿と池田紀伊守恒興を増援させ、山陰には信孝殿を主将に明智光秀殿と丹羽長秀殿を差し向けた。

（親父様、本気で毛利を滅ぼすおつもりですか？ 出来れば痛めつけても最後は従属させるって方向でいってほしいなあ、………これって『上から目線』でしょうか？）

畿内については、筒井権少僧都順慶殿、高山大蔵少輔右近殿、河尻肥前守秀隆殿、蒲生飛騨守氏郷殿で紀伊の残党狩りをした。尤も多くの者（特に鉄砲作りに長けた者達）は早くから近江の国友に移住させており、残っていたのは根来寺の残党だけだったようだ。

東海道は、先頃同盟を反故にしてきた徳川には、我が叔父である織田上野介信包殿が尾張に領地替えして備えている。

北陸道は、柴田勝家殿が加賀をほぼ手中に収めたようだ。俺が今年中に越中へ出張る頃には能登に手が届く頃かな。

そういえば、四国、特に長宗我部に対する動きがまだ無いなあ。『

まずは毛利。長宗我部はその後で』って事かな。

■天正9年（1581年） 1月

「御免下さい」

城主の間で政務をしていたら、家臣から『上杉の者と申す者が参つておりますが、如何なさいますか』と連絡が来た。

この糞寒い最中に苦勞な事です。

「それがし、上杉家家臣、泉沢河内守久秀と申す。織田源三郎勝長様に御座いますか!？」

「いかにも、それがしが勝長だが…（何だろう、こんな時期に?）」

「此度、我が上杉は織田に臣従したく、信長様へお取り成しをお願いしたくつ!」

「…………（はあ? 今『臣従』って言った? 何かの間違いだろ、なんで上杉が織田の臣下に下るの? 意味判んないんですけど、それにしても暑苦しい奴だなあ、真冬なのに…………）」

「宜しく願いますっ!」

「取り敢えず、この時期に我が織田に臣従する訳をお教え願えますか? それと何故それがしに取り成しを頼むのかも…」

「はっ、お恥ずかしい事ながら当家は現在、内と外に敵を抱えており身動きが取れませぬ。ならばこの際織田に、という次第で御座います。また勝長様を頼らせて頂いたのは、当家の奥方が武田家の出であり、武田家に『当家と誼のある勝長を頼られては如何か』と口添えを頂いた次第に御座います」

「…………（ん、何か凄い端折った説明だなあ。多分最初は武田家に口添えを頼んだけど徳川家の事で微妙な空気になって困った、つてのが本当の所だろう。それにしても『誼のある勝長を頼れ』って、これは盛信殿だな、きつと。あの人、人は良いけど自分が困ると直ぐに他人を頼る癖があるからなあ。それにしても何で武田家じゃなくて織田を頼るんだろう、その辺りが謎だ。はあ、上杉家にも何か思惑が有るのかも知れないが、頼られたからには何とかしたいけ

ど……）」

「……」

「判りました。取り敢えず上様（我が愛すべき親父様の事）へ書状を出します。その返答をもって如何するか考えましょう」

「はっ」

返答は直ぐに来了。そして書状には『御坊に任す』の一文だけ書いてあった。……えっこれだけ？ 相手はあの上杉家なんですけど……。謙信亡き後の上杉は眼中に無いって事ですか？

流石に『うゝん』と俺が唸っていると、最近当家の筆頭家老（飯）のようになりつつある一益殿が助け舟を出してくれた。

「勝長様、そういう事であれば上杉家に誠意を見せて貰ってから事を決めては如何で御座いましょう」

「……誠意とは？」

「まず領地は越後一国を認め、その上で当家の越中攻めに参加して貰うのです」

「越中・能登・加賀から手を引かせると申すか」

「左様です、その上で手伝い戦をさせるので御座います」

「……しかし、上杉は内にも乱を抱えていよう。果たして越中攻めに参加出来様か？」

「出来る出来ないではなく、させるのです」

「……判った、久秀殿」

「はっ」

「当家は今年の6月にも越中へ攻め込む予定である。其れに参加するよう景勝殿に伝えよ」

「はっ」

こうして、暫定ではあるものの、上杉家が織田家の家臣となった。

……ホントに良いの？

■天正9年（1581年） 2月

督が俺の子を懐妊した。やったぜ！（実際、見に覚えが御座います、ハイ）

茶々も羨ましい半分、喜び半分で祝ってくれる。ウンウンっ、正室と側室の隔たりも無く家中平和で良い事だ。

そんな訳で今日は一日督の部屋で家族皆で談笑している。

「生まれてくる子は男の子かなあ、それとも女の子かなあ」

「男の子に決まっております。当家の世継ぎに御座います、ねっ督殿」

「えっ、あっ、はい」

「しかしなあ、俺は茶々にこそ世継ぎを産んで貰いたかったのだが……」

「（ポツ）……私は未だ体が出来ておりませぬ故、閨は共に出来ませぬ！」

「はははっ、茶々との逢瀬はもう少し先か、其れは残念じゃ、はははっ」

「んもう、殿は意地悪です」

茶々をからかいつつ周りを見渡すと、督は顔を染めながら幸せそうに微笑んでおり、二人の姫はポカ〜ンと茶々と俺を眺めていた。（姫達にはまだ早いよね、でも嫁にはやらんともう決めているんだ）

「まあ正直なところ、男の子でも女の子でもどちらでも構わぬ、無事母子共に健やかであればな。督は初産ゆえ何かと心細かるう、茶々もその辺りを踏まえて督を助けてやってくれ」

「「はい」」

和やかな一家団欒。誠にもって目出度い。俺はこういう一生を送り

たかったのだよ。間違っても親の勝手であつちこつちに流されて、さあこれからつて時に殺されるような人生なんてご免だ。

■天正9年（1581年） 2月

何で上杉家が織田に臣従を申し出て来たか、無い知恵を絞って考えてみた。そして判ってきた事がある。

まず、越後という場所柄だ。南は関係が良好な武田家が居るのだが、東に最上家、芦名家、伊達家といった奥羽勢があり、西からは織田家が迫っている。そして東西の敵に対して直ぐに武田家から援軍が来れないので、初期対応には自力で当たらなければならない。そして内が固まっていらないから東西から同時に敵が攻めてきたらお仕舞いという訳だ。

だったらどちらかと手を結ぼうと考えても不思議ではない。そしてその『どちらか』が織田と云う事だ。

これにより、新発田重家を討って内乱を終わらせて国力が戻ったら、後ろと横っ腹を気にせずに奥羽攻略に集中出来る形を取れる。

ただ一つ問題がある。既に武田家と同盟を結んでいた事だ。同盟を結んでいるにも関わらず他家に臣従する訳だから、現状“織田家は敵ではないが味方ではない”という距離にいる武田家としては面白く無いはずだ。

しかし此处で『織田家に従おうと思っているのだが、その取り成しをお願いしたい。また同盟は一旦破棄となるがこれからも武田家との誼は続けたい』と上杉家から言われ、武田家が俺を紹介した事でこの問題を一気に解決した訳だ。

武田家への仲介依頼と織田家への臣従。双方とも従来の武士、特に

気概の高い上杉家では考えられない事だ。

実直そうな上杉景勝や先の泉沢久秀ではまず考えられないだろう、

……この二点を考えた切れ者が上杉に居る！ 俺の敵となるかそ

れとも……、出来れば味方となって欲しい所だ。

第十三話 飛驒の喜び／虚心坦懐／（その3）（後書き）

連載当初は、『書いていけば、そのうち文章力もUPするだろう』
と軽い気持ちでいたのだが、未だにお子ちゃまLvのモノしか書け
てません。（自己嫌悪）

相変わらずの見苦しい駄文ですが、今後ともお付き合い頂ければ幸
いです。

第十四話 飛驒の喜び／虚心坦懐（その4）

■天正9年（1581年） 3月

最近、俺は飛驒の国力向上に腐心している。

此処で云う『国力』とは住人と税の増加であり、その為には産業を興したり、人や物、そして金銭の流れを活発にさせる事なのだが……、現状、飛驒は地理的条件が悪すぎる。

まず東西を山脈で遮断されており、北の越中は敵国のため人や物、そして金銭といった流通が難しいため、どうしても南の岐阜に頼るところが大きくなる。

「如何したのか……」

無い知恵を絞ってみても、中々此れといった産業などが直ぐに思い付く訳でもなく、ぼんやりしていると傍にいた義春が申し訳なさそうに話し掛けてきた。

「……勝長様」

「んん？」

「勝長様は甲斐に居りました時、盛信様にいろいろと興業について献策されたと同っておりますが、この飛驒で同じ事は出来ないのでしょうか？」

「うん、結論から言えば『無理』だなあ。甲斐というか武田家の時とはまず住む人の数が飛驒と雲泥の差がある。人とは可能性だ、人が居るから物を作ったり、移動させたりする力が生まれるのだ」

「はあ」

「つまり武田家では、未だやっていない何か、あの時は織物や絹・麻・綿などの紡績、港を利用した茶や硫黄の輸出だったが、それらを行なうだけの人が居たし居なければ雇うだけの資金となる碁石金

がまだあつた」

「……」

「しかしこの飛騨には、人の数が少なく、また雇い入れるだけの資金も無い。そして結構商いには重要なんだが遠方との交易に利用できる海というか港が無い。……八方塞りだ」

「……資金と人を本家から分けて頂く事は出来ないのでしょうか？」

「うん、多少の融通は聞いてくれるかもしれないが……、あの親父様だからなあ、直球でお願いしたらまず却下だな。……言い方を変えて試してみるか」

「そんなに気難しいので御座いますか、御父上様は？」

「……気難しいというか、天邪鬼というか、面倒臭いのを嫌がるというか、回りくどいのも嫌いというか……」

「……勝長様も気苦労が絶えませんね」

年下の義春に励まされてしまった、……なんか空しい。

■天正9年（1581年） 3月

飛騨の国力向上について頼りになる一益殿にも相談したのだが、結論は『地道にやったら10年は軽く掛かる。そして上様はそれを許さないだろう』に落ち着いた。やっぱりそうなるよね。

という事で、俺は安土の親父様に金の無心をする事にした。

ダンっダンっダンっ！（毎度の事ながら、親父様のご登場おー♪）

「御坊、本日は何用じゃ！」

「はっ、本日負かり越しましたのは、上様にお願いの儀が御座いますて参上した次第に御座います」

「して」

「はっ、一つに、此度飛驒の地で鉄砲生産を行ないたく、その資金と職人をお与え願えませんか？」

「……」

「既に当家には国友という鉄砲生産の地が御座いますが、鉄砲の生産技術は秘中の秘とすべきかと、なれば、山々に囲まれております飛驒は打ってつけかと」

「……」

「更に鉄砲だけでなく大筒も生産したいと考えております」

「……」

「また武器だけでなく、というか武器製造を誤魔化すため生糸や製紙の生産を始めたいと思います」

「……であるか、して如何程掛かる」

「はっ、銭2万5千貫と紀伊の雑賀で鉄砲鍛冶に携わっていた者10名、美濃の関にて刀鍛冶に携わっている者10名、生糸・製紙の得手な者20名になります」

「好きにせよ」

「ははっ」

何とか産業の目処が立ったな。ただ本家に依存し過ぎるのも何だし、他にも興業出来る事が無いか考えておこう。

■天正9年（1581年） 4月

本家から与えられた鉄砲鍛冶と刀鍛冶の職人を中心に、鉄砲と大筒の生産と並行して職人の育成を行なう旨を一部の家臣に命じた。そしてその場所だが旧 高原諏訪城（現 岐阜県飛驒市）の跡地とした。この辺りは亜鉛や鉛、銀の鉱山があるので鉱物の算出に山師が行き来する。その山師に紛れれば鍛冶職人が往来を誤魔化す事も容易となるだろう。

また生糸と製紙については高山城の近くに工場を建て、住人から働き手を募集する旨を家臣に命じた。

生糸と製紙の生産は軌道に乗るのは早くても二年、鉄砲と大筒に至っては三年は掛かるだろう。まあ天候による影響が少ないから一定の収入が得られるとして、他にも興業出来る事が無いだろうか……あった。

まずは酒だ。この時代は白く濁った酒が主流だ、だったら此処で清酒を造れば結構人気が出ると思う。それと比較的に蕎麦とか芋が安定して採れるから焼酎なんかも造ったら良いかもしれん。

それから良質な大豆と水があるから味噌や醤油の製造なんかも向いているだろう。ただ山国だから圧倒的に原料の塩が不足しているが、此処は交易により取得するでしょう。うん、交易は一方通行では必ず荒む。双方向で盛んになれば産物だけでなく金銭も流れるし、そうなれば税も増えてくるだろう。

今思い付く興業はこんな所かな。後は飛騨全域でも楽市楽座を導入して、街道を拡大させてもつと美濃方面との交易の流れを盛んにしていこう。まあ、まだまだこれからだな。

■天正9年（1581年） 4月

今日の俺は飛騨の河川を調べている。此の地は何と言っても険しい山々に囲まれているため、急流な河川が多い。主だったところでは飛騨川、宮川、庄川だが、毎年大雨が降ると氾濫が多発する為に折角の田畑に甚大な被害が出ている。

一度に全ての河川の治水工事が出来る程裕福ではない当家であるが、

何もしないでは未来永劫水害からの脅威は無くならない。

そこで、飛驒川の旧 桜洞城付近、宮川の旧 増島城（現 岐阜県飛驒市古川町）付近の工事を行なう事にした。此の辺りは毎年の洪水で放置されているが治水が良くなれば美田が広がる事間違いないだろう。

産業にばかり注力せずに少しでも石高を上げる努力もしておかないといけない、腹が減っては戦は出来ぬってね。

そんな訳で、飛驒に駐屯している兵1万人を動員して治水工事と農地整備を今年の田植えまでに間に合うよう2月の糞寒い最中から行なっているのだが、やっと目処が立ち始めたのだった。

「勝長様あ」

工事に同行した義春が俺の名を呼びながら、遠くから元気に走ってくる。

「何だ義春う、そんなに急いでは転ぶつ……」

「えっ……うわっ」

言ってるそばから思い切り義春が転んでしまった。

「大丈夫か」

「痛たたたあ、……大丈夫にございます」

「…そうか、気を付けると言おうとしたのだが、間に合わなんだようだ」

「はははっ」

「して、何か用か？、そんなに急いで」

「あっはい、あちらで皆さんが山積みになった低木を如何するのか悩んでおりますう」

「はあゝ、低木うゝ。そんなの決まってるだろう！ 薪だ！ 薪い！ 当家は唯でさえ銭が無いんだ。無駄は厳禁！」

「あっはい、判りました。そう伝えて参ります」

何か子犬みたいだなあ、義春は。こいつもそろそろ元服のことを考えてやらんと…。

真面目な話、俺は此の治水工事を行なっていてチョツとだけ武田家に人質に出てて良かったと思う。なぜなら、武田家の治水技術は天下屈指であり、その技術を多少かじる事が出来たからだ。『信玄堤』に代表される『聖牛（川倉とも言う）』とか『菱牛^{ひしうし}』といった技術をあの“嫌味な”快川和尚からゴホン……武田家から学べた事を感謝しよう。（快川和尚個人には一片の感謝の情も生じません！）

こうして飛騨川と宮川に『霞堤』だけでなく武田家の技を駆使すれば、洪水も抑えられるだろうし、それによって半年後には美味しいご飯が食べられる、ウン良い事したし今日の飯も旨そうだ。

第十五話 越後の遺影（誠心誠意）（その1）

■天正9年（1581年） 5月

来月からの越中攻めは稲葉伊予守良通（一鉄）の手勢1千5百と、池田紀伊守恒興の手勢1千5百に俺と滝川の軍勢1万2千を加えた計1万5千で行なう事となった。

そして越中の情勢だが親織田派の神保長住と、親上杉氏の政策を維持しようとする長住の父長職や重臣小島職鎮らとが対立している事が判った。つまり此度は長住の助勢も兼ねての進軍となる。

俺は今、越中攻めの準備をしているのだが、まだ越中へ進軍した訳ではないのに今回の越中攻めをある意味楽しみにしている。なぜなら……。

「勝長様っ！ 勝長様の初陣は如何で御座いましたかっ！」

「うゝん、俺の初陣は兵站奉行で、戦は後方で督戦してたなあ」

「左様で御座いますかあ……、しかし武田と北条の戦であればきつと壮絶なもので御座いましょうなっ」

「うゝん、鉢形城は兵糧攻めだったし、八王子城の攻防戦には参加してないから“壮絶”って言葉はどうかなあ」

「……」

「あつ、しかし川越城の攻防戦は凄かったな。勝頼殿率いる武田勢と綱成殿の北条勢の虚々実々の駆け引きによって一進一退だったから」

「成程！ それがしもその様な戦をしたいものです！」

俺はこの戦が初陣となる稲葉典通と話している。歳も1つ下という事もあり俺に懐いてくれているのだ。やはり歳の近い者が一緒だと話していて楽しいな。

しかし……声がデカイよ、それに顔を近づけすぎ！ 齒あ磨いてっ、

臭いよ！

そんな典通と話していると池田元助・輝政が来た

「勝長様、家臣の方が『越中攻めにあたって早急に決済して頂きたい書類がある』との事にございます」

「うむ、判った」

「それから我が父・恒興より『輝政は此度が初陣ですが、足手纏いなら何時でも置いて行く所存』との言伝を受けております」

「あつ、それは言い過ぎでございます。それがしだってやる時はやる男にございますぞ！」

「はははっ、元助と輝政は仲が良いな」

俺より6つ年上の元助は幾分一步引いたというか、常に落ち着いている。俺も元助の歳になればもう少し落ち着くのかなあ

そして、輝政は俺と同じ年にも関わらず、未だ幼さが幾分残っている。若いなあ……って思う自体、俺は結構苦労してるんだろなあ。

ここ最近夜は、というか夜になっても越中攻めの事前準備に追われている。今日も一益とともに兵糧や武器弾薬の調達に関する指示書を作成している。

「ふう、一益。この辺りで少し休まぬか？」

「そうですね、少し休むとしましょう」

「あまり根を詰めすぎても良い仕事は出来ぬよ」

「ははっ、他の者に白湯でも持ってきて貰いましょう」

小休止を取り、少し落ち着くと俺は最近気になっている事を聞いてみた。

「一益とは飛騨攻め以来だからもう1年近く共におる事となるが、本領の伊勢は大丈夫か？」

「はははっ、ご安心下さい。我が愚息・一忠が伊勢に居りますし、次男の一時も政の真似事をし始めましたので大丈夫にございます」

「そうか……、一忠と一時は幾つになる？」

「そうですね、一忠は今年で28歳、一時は13歳になったかと」
「ふむ…、一忠は稲葉典通の様に戦に出たいと言わぬのか」

「…申し訳御座いません。一忠は生まれつき病弱でございますので、戦には向きませぬ。その代わりといっては何ですがこの一益一生懸命働かせて頂きます」

「はははっ、別に責めている訳ではない。人には向き不向きがあるゆえ、その才が活きる道を歩んでいれば問題ない」

「はははっ、左様でございますか。まあそれがしも戦しか能がありませんゆえ。がっはははっ」

■天正9年（1581年） 6月

越中に向かう織田勢は飛驒との国境を超え、庵谷峠に差し掛かったところで上杉の使者が現れた。

「それがし上杉家家臣・山岸尚家と申します」

「うむ、役目ご苦労。して、上杉の進軍は如何なっております」

「はっ、魚津城4千に対して我が上杉は3千5百をもって城を包囲しております」

上杉が軍勢を魚津城（現 富山県魚津市）に向かわせた、兵は3千5百との事だ。まあつい昨日まで“親上杉氏”だった神保長職や小島職鎮を討とうというのだから形だけになるだろう。

しかし、敵勢を魚津に縛り付けておいてくれるだけで織田としては十分と言って良い。

「相判った、引き続き包囲を緩めず蟻の子一匹逃さぬよう事に当たるべし」

「ははっ」

山岸尚家……、一見能吏の様だが、こ奴か？ 否、武田家への仲介依頼と織田家への臣従、上杉家の舵取りするのだからその重圧は凄

まじいものがあるはず。そして目の前の男からはその重責からくる程のものが感じられない。会いたくないような、会いたくないような……。

■天正9年（1581年） 8月

上杉勢が魚津を包囲してくれている間に、富山城（富山県富山市）を奪還し、更に織田勢は越中中部から西部に掛けての一揆や長職方の残党を討ち進んだ。そしてやっと魚津に布陣する事が出来た。

「して城方は如何なっておるか」

「はっ、当初4千であった敵勢も何度か城から打って出てきた折に此方が押し戻した事、更に先月辺りから兵糧が底をついた事により2千5百程に減っております」

俺の質問に対して、景勝殿の横に座る男が丁寧に説明する。うーん、形だけの攻軍だと予想していたが、“ちゃんと仕事はしますよ、誠意は守りますよ”って事か。

「成程、既に城方は戦う気力が薄れてこようか……。上杉諸将、皆ご苦労であつた」

「「ははっ」「」

「景勝殿も国内が不穏な中での手伝い戦、ご苦労にござる」

「……はっ」

“景勝殿、もう少し愛想良くしようよお、話が膨らまないじゃないかあ”などと俺が考えていると先程説明していた男が話し掛けてきた。

「勝長様をお願いの儀がございます!」

「……貴殿の名は?」

「申し送れました、それがし上杉家家臣・直江兼続と申します」

「ふむ、して願いは？」

「はっ、この魚津が落ちた暁には当家春日山城（現 新潟県上越市）にて臣従の儀を執り行いたく、越後まで足をお運び願えませんかようか」

「……」

“如何したものか”と思案しながらチラツと横に座っている一益を見ると渋い顔をしていた。……“駄目、断れ”って事かなあ。

「臣従の儀であればこの魚津でも構わぬと思うが……」

「あいや、これまでの越中攻めの疲れを癒して頂きたく、宴などの催しを行なわせて頂きます」

ここまで言われると“行かない”とは言えなくなった、むむっ、無碍に断るとなると織田の信義にも関わり、主従も糞も無くなるよなそれに“織田の手伝い戦に付き合ったのだから、今度は……”っていう思惑が見え隠れする。

あつ……そういう事か！ 俺が越後に行くとなれば、全軍とはいかなくてもかなりの兵を共に進軍させなくてはならなくなった訳だ。
“織田の手伝い戦に付き合ったのだから、今度は……上杉を助ける！ 新発田重家の討伐に付き合え！”って事か。

「相判った！ 上杉の誘い有難く頂戴する」

「ははっ」

幾ら北陸とはいってもこの糞暑い夏の進軍だ、甲冑が焼けて大変なんだよな。……早く飛騨に帰って茶々とイチヤイチヤしたいなよお。

第十六話 越後の遺影（誠心誠意）（その2）

■天正9年（1581年） 8月

稲葉勢を美濃に、滝川勢の一部を飛騨と越中に歸し、池田恒興と池田勢には暫定的に越中の留守を任せて、残りの織田勢8千は越後上杉の居城・春日山城に赴いた。

「御坊丸殿……今は勝長様と名を変えたとか。お久しぶりにございます」

「はい、菊姫様もご壮健で何よりです」

「甲斐に居た頃は小さかった童がこんなに凛々しくなられ、既に数々の武勲まで挙げられているとか……」

「はははっ、周りの者がよく働いてくれるだけでござる。それがしは甲斐にいた頃から大して変わっておりませぬよ」

春日山城に着いて早々に宴となり、俺は菊姫と体面した。

（甲斐に居た時よりも綺麗になったよなあ……、イカン、俺には茶々と督という大事な妻が居るんだ！）

「……勝長様、如何なされました。まさか越後の水が合いませんんだか？ それとも戦の疲れが出ましたか？」

「はははっ、何でもござらぬ。大丈夫にござる」

「そうですね、それなら良いのです」

「勝長様、越後の酒は如何ですか？」

「……それがしはあまり酒は強くないのだが、味は美味いと判りますな」

「それは良うございました」

兼続が俺に酒を勧めてくる。正直もう飲みたくない、って言うか酔った。

そんな俺の様子を見ながら兼続は酒をどんどん飲み干していく。コイツ、ザルだ！　そしてわざと俺を酔わそうとしてないか？　もう面倒臭いのでこの辺から本音の話をしよう。

「して、此度態々この越後まで我等を連れてきた真意は何かな？」

「真意と言いますと？」

「……それがしはもう酔った。我が父と同じく面倒臭いのは苦手だ、回りくどい話は抜きに願う」

「……」

「……」

「……上杉による越後平定に助勢願います」

「やはりな、……8千で足りるか？」

「はっ、有難うございます」

うゝ吐きそう！　早く厠に行きたい！　横になりたい！　出来れば茶々の膝枕があれば、なお嬉しい！

■天正9年（1581年）　8月

当初の予定に反して俺は越後北部に、織田勢8千と上杉勢7千の計1万5千の軍勢が進軍している。

この新発田重家だが、なぜ重家を離反したかというところ……三条攻略・蘆名撃退など数々の武功を挙げて新発田勢の活躍に相応する恩賞を期待していた事が事の発端だ。

しかし、重家が貰えるものと思っていた恩賞のほとんどは、景勝子

飼いの上田衆の手に渡り、亡くなった兄・長敦の功績は軽んじられ、重家に対する恩賞も新発田家の家督相続保障のみに終わった。

そして蘆名盛隆と伊達輝宗が、重家が景勝に対して不満を募らせている状況を見て、上杉に対して反乱を起こさるべく様々な工作を行った。

結局、重家は一門衆の他に、新発田本家筋の加地衆や、上杉景虎を支持していた豪族を味方に引き入れ新潟津を奪取、同地に新潟城を築城し独立するに至った訳だ。

……蘆名に伊達っ！ 火に油を注がないでよ！ 少しはこちらの苦労も考えてさあ！ 面倒臭いなあ、全くもお。

「直江、まずはそなたの存念を申せ」

「はっ、まずはこの新潟城（現 新潟県新潟市中央区）を、次に加治城（現 新潟県新発田市）、そして最後に新発田城（現 新潟県新発田市）と攻め進んでいく所存にございます」

「……（頭痛い）」

「新潟城の造りは三層の楼閣二棟、平屋の屋敷二棟、そして水辺の三層の櫓一棟となっております」

「……加治城と新発田城は？」

「加治城は、櫛型山脈の南端に位置し、加治川・坂井川などの加治川水系の河川が織り成す広大な氾濫原を眼下に控える所にあり、造りは要害山を利用して六つの曲輪、堀切、土塁、土橋で作られた山城でございます。この城は後ろ盾である藤戸神社から攻めれば容易いかと存じます。」

また新発田城につきましたは、近くを流れる新発田川の流れを利用した平城で、本丸の北西隅に三階櫓と呼ばれる実質的な天守がございます。その他の造りは表門、二の丸隅櫓と石垣、水堀、土塁、辰巳櫓となっております」

「……（うつつ、多分二日酔いだ。越後の酒は喉ごしは良いけど強いな。飛騨で作る酒は後味すつきりにしよう。何か直江の長い説明が終わったな、じゃあ始めるか！）」

俺は唯でさえ真夏で脱水症状に成りかけの上に二日酔いが抜けない体を押して、大声で戦の始まりを告げた。

「これより新発田征伐を始める！ 皆のもの！ 命を惜しむな、名を惜しめい！！」（うつつ、頭がクラクラするうっ）

「ははっ」

■天正9年（1581年） 9月

「これで勝ったと思うなよ！」

俺達織田勢と上杉勢の諸将が居並ぶ陣屋に新発田重家が引つ立てられてきた。“勝ったと思うな”って、この後何かあるの？ まあいい。

「景勝殿、後は貴殿の良い様になされよ」

「……はっ」

相変わらず『ウチの親父様以上に無口な』上杉景勝が俺の言葉に目礼すると、『景勝殿を操る腹話術師』ではないのかと勘繰ってしまう程に空気を読んだ直江が新発田重家を罰を宣言する。

「新発田重家、その方と此度の乱に加担した者はすべて斬首とする」
「……」

「更に加担していなくても一族すべて粟島に流罪とする」

うっん、内乱を起こした者は仕様が無いとしても、女子供は可哀想だなあ。この戦国の世、明日は我が身というが……茶々や督には

こんな仕打ちが及ばないように頑張らないとな、俺。
まあ今回の戦で『上杉は直江が居る限り侮れない』って判っただけでも収穫かな。

■天正9年（1581年）10月

もうトンボが舞う季節なんだなあ。

俺達は今少しで高山城に着く。5月の末に越中へ兵を挙げてから四ヶ月強……長かった。

「お帰りなさいませ」

「「お帰りなさいませ」」

「だあ」

茶々が俺の帰還を嬉しそうに迎えると、督や登久姫、熊姫を始めとする城内一同も迎えてくれた……のは良いのだが、督が抱いている赤子は誰ですか？

………なんと督が抱いている赤子は先週産まれた俺の子らしい。
それ男の子！ やったぜ！

「未だ名前がございません。殿、この子に良い名を付けて下さいませ」

「んんうゝ、俺の幼名の“源三郎”を与える。母子共に健やかで何よりじゃ」

「有難うございます」

羨ましそうな茶々と嬉しそうな督、源三郎が可愛いのか何かと世話を焼きたがる登久姫と熊姫、そしてそれを微笑ましく見る俺と横に

居る義春。……平和だなあ、何か『家』に帰ってきたって実感が湧いてきた。

第十七話 越中の帰還〜順風満帆〜

■天正9年（1581年）11月

越中・越後から戻ってきて、直ぐに親父様からのお達しもあり一益が伊勢に帰る。

「其れでは勝長様、また何処ぞで共に働く事もあるうかと存じます
が、其れまでご壮健で…」

「ああ、あの（人使いの荒い）上様に仕えているのだから、もしかしたら此方から伊勢に赴く事もあるかも知れぬな。それまで一益も壮健でいてくれ！」

「はははっ、働き甲斐があるのは良い事です。また伊勢に来る事があれば嬉しいですな。それでは…」

一年近く飛驒に留まり俺を助けてくれた一益には感謝してもしきれない。約束通りというか今までのお礼として、滋養に良いという薬を一益の嫡男・一忠へ送った。

■天正9年（1581年）12月

今年も後一月で終わりか、長かったような短かったような……。感慨深い一年だったのだが、今の俺には現実逃避が許される時間は許されない。

半年に渡って飛驒を留守にしていた為、決済書類が山積みなのだ。幾ら決済しても不動の山は低くなってくれない……。

そして今日も家臣が俺へ裁決を求めたり、報告をしようと列をなし

ている。

「殿（俺の事、エッヘン）、鉄砲、大筒の製造経過に関する報告書が届いております」

「其方に置いておいてくれ。この書状の後に確認する故」

「殿、今年の米の出来は良好との事にございます。今年採れた米の内、三割を酒造にまわせば宜しかったでしょう？」

「……ああ、其れで構わない」

「殿、今年大豆は去年の一割増しの出来高との事にございます」

「……そうか、塩の手配も越中からの販路が出来たゆえ、来年には旨い味噌と醤油が造れそうだな」

「殿、生糸と製紙の工場がやっと軌道に乗り始めたそうにございます。中間報告の詳細が書状が届いておりますが如何なさいますか」

「……暫し待て、今手元にある書状の決済を済ませた後に確認する故」

「殿、今年算出した亜鉛や鉛、銀の採掘量に関する報告書が届いております」

「……判った……、後でじゃ」

今更ながら一益の助けは大きかった事に気付く。……飛騨には海は無いはずなのに、書状の海で溺死しそうだ。なんとか有能な家臣団を早く作らねば、俺、過労で倒れそうです。

■天正10年（1582年） 1月

史実では今年俺は死ぬのだが、色々史実と乖離しているし……死なないよね、俺。

今、俺は安土城の評定の間に居る。俺だけじゃない、織田家の主だった家臣が集まっている。なんでも今年から正月の挨拶の前に織田

「良しっ！ キンカンっ 貴様の近江・坂本の地は召し上げる。代わ
りに丹波・但馬の二力国を与える」

「はっ」

「丹後は細川を与える。三七っ（我が兄・信孝殿の事）、因幡を与
える故、キンカンと共に山陰を攻め立てよ！」

「ははっ」

（あれれえ？、信雄殿だけでなく信孝殿も中国方面に……、って光
秀は畿内じゃないの？ 山陰方面軍？）

その後も諸將の昨年一年間の成果の報告と論功行賞が続いてゆき、
いよいよ俺の番となった。

「御坊っ！」

「はっ」

「昨年は飛驒・越中だけでなく、越後の上杉を従えた事、重畳じゃ
！」

「はっ、有難き御言葉っ！ これも滝川殿を始め美濃・尾張の諸將
の助勢のお陰にございます」

「謙遜は無用じゃっ！ そなたの尾張・犬山は召し上げる。代わり
に飛驒と美濃の采配を任せる。働けい！」

「は……ははあっ！」

（えええ、信濃方面の最前線って事？）

この後も評定は進み、尾張は叔父の信張殿と信包殿に、伊勢・伊賀・
志摩の采配は滝川を始めとする諸將にそれぞれ采配が委ねられ、若
狭を拝領した丹羽長秀には畿内の軍勢を集めて四国討伐の準備が命
じられた。

……ヤダなあ、武田家が攻めてきませんように祈っておこう。

■天正10年（1582年） 1月

美濃の指揮を任された俺は、地理的な理由で飛騨・高山城から美濃・岐阜城（現 岐阜県岐阜市）に居城を移した。

美濃は飛騨に比べて断然商業が発達しているため、茶々や督達と商店を見て回ったりしながら毎日楽しく過ごせそうだ。

美濃の諸将を配下に従える事になり、俺は今、諸将から拝謁を受けているのだが……。稲葉、氏家、池田と続き……。居た！ 森長可が嫌々というか渋々といった感じで下座に座っている。

「……勝長様には、此度美濃の指揮を執られる事となり、……誠に祝着にございます」

「うむ、これからも森家の働きに期待する（長可い、そんなに嫌なら来なくて良いよ）」

「……はっ、今後も織田家と上様のため、粉骨働く所存にございます」

「……そうか、励め！」

“織田家と上様のため”って、俺のためには働きませんよって事か！？ 今に見ておれ、この猪武者めえー！。

長可の反発を俺が心の中で反芻していると、長可が改めて俺に話し掛けてきた。

「勝長様、飛騨と美濃の采配を任されたからには今年には信濃攻めが行なわれるのでしょうか？」

相変わらず“頭の中は戦の事しかありません”と言わんばかりの長可が信濃攻めの有無を問うてきた。

「否、その考えは無い。飛騨と美濃の軍勢だけでは武田には敵わぬ

し、他の地より兵を借りるといつても尾張は徳川への牽制で外せぬし、畿内の軍勢は四国攻めがある故余力は無いだろう」

「…それでは三河攻めでございますか」

「それも難しいだろう。徳川家は遠江・三河の2カ国を版図とし最大で1万6千の兵を動員できる訳だが、これに武田が…全軍とはいかなくても例えば信濃勢1万2千程が加勢した場合、美濃と飛驒の全軍1万7千だけではどうにも出来ぬ」

「尾張の兵を加えれば宜しいのではありませんかっ！」

「………忘れたのか。俺が指揮権を委任したのは美濃・飛驒の2カ国のみ。尾張は含まれておらぬ」

「……上様に申し出てみては如何でしょうか？」

「それは出来ぬ。それでは此度尾張を任された信張殿と信包殿の顔が立たぬ」

「……左様にございますか（シュンッ）」

残念そうに俯く長可。ふと長可の後ろの方を見ると稲葉典通も残念そうにしていた。稲葉典通は長可と違って話易いし良い奴なんだが、どうも戦好きという事で長可と馬が合うらしい。

……お前ら、そんなに戦がしたいなら、毛利攻めの方に推薦してやるつかあ？ ……何かホントに喜んで行きそうだから怖いな。って言うか真面目に内政しろよ！

第十七話 越中の帰還〜順風満帆〜（後書き）

親父様からの無茶振りに対して逆ギレするルートと本能寺ルートは辞めました。：書きながら吹いちゃいそうだったから。

第十八話 土佐の蝙蝠と四海兄弟

■天正10年（1582年） 4月

美濃に来て3月が経ち、やっと少しずつ生活が落ち着いてきた。

飛騨を離れるに際しても、始めの1ヶ月で殆ど岐阜城で引き継ぎ作業を行ない大した混乱もなく移行出来た。

飛騨については取り敢えず代官を置いて、高山城には河尻肥前守秀長を城代に任命しておいた。ただ鉄砲や大砲の製造については場所は勿論の事、製造していること自体が極秘事項という事は秀長に申し渡しておいた。

（信濃の直ぐ近くの飛騨で製造しているなんて鉄砲を欲しがっている武田家に知られたら、何時攻めてくるか分かったもんじゃない）

また、林業だけでなく家具や工芸を推奨していききたいとの家臣からの要望が挙がってきたので、

「折角だから漆器を手始めに磁器や陶器なんかも作ってみては？とりあえず5千貫を渡すから試してもらっていいかな」

って助言とお金を渡したら喜んで帰っていった。ぜひとも上手く発展してほしいところだ。

また、この美濃においては既に親父様の代以前から商業、農業や工業が発達しているため、改めて何か興行や検地を行なう必要も無いため至って楽だ。

という事で、最近は家族団らんを充実させている。（また何時長期出張となるか判らないもんね）

今日も昼間は登久姫と熊姫が楽しそうに遊んでいるのを見守りなが

ら源三郎をあやし、夜は茶々と共に風呂に入る。

最初は恥ずかしがっていた茶々だが、最近は風呂場で話をする事で親密感や帰属感を感じられるのか、喜んで共に体を洗いあっている。「登久姫と熊姫も最近は殿に懐いてきましたね」

「そうだな、仕事が落ち着いて共に居る時間が増えた故、安心したのやもしれぬな」

「そうですね、ふふふっ」

「それに源三郎も殿に抱かれても愚図らなくなりました」

「そうなんだ、なんだかやっと父と認めて貰えたようで俺も嬉しいよ」

「…私も早く子が欲しゅうなりました」

「こればかりは天からの授かりものだからな、気長に待とう」

「…はい」

茶々と閨を共にするようになったからか、最近茶々の体に丸みを帯びてきた気がする。早く茶々にも俺の子を産んで貰いたいものだ。そう思いながら茶々の胸を揉んでいたら、バシッと手を叩かれた、残念。

「茶々は閨に入ってからです！」

■天正10年（1582年） 5月

平和な時間というものは長くは続かない。親父様から呼び出しを食らったからだ。

ドスっドスっドスっ！（…あれ？ 普段より足音が大きいぞ）

普段より更に大きな足音を奏でながら親父様が現れ、上座にドカッ

と座ると、おもむるに

「御坊！ 信忠と共に四国へ行け！」

「…それは構いませんが、些か急を要するようですが、訳をお聞きしても宜しいでしょうか？（相変わらず話が唐突だな、翻訳する身にもなつてくれ！ それにしても今日は機嫌が悪いな、あまり血圧上げると卒中起こすぞ！）」

「長宗我部よ！ “鳥無き島の蝙蝠” と思うておったが、土佐・伊予・阿波と手中に収め、後少して讃岐を取り四国を統一する勢いじゃ！ 御坊、長宗我部を黙らせよ！」

「…はっ、して落とし所は？（流石に長宗我部を攻め滅ぼせつてのは無理ですよ）」

「うむ…土佐一国、と言いたい所じゃが伊予を加えた二力国とする」

「ははっ！（二力国が、妥当かな）」

こうして長兄の信忠殿を主將に、俺と丹羽長秀が副將となって四国攻めを行なうことになった。兵や兵糧自体は既に丹羽長秀が畿内で集めていたので、美濃・飛騨の兵は率いる事はない為直ぐに堺港に集結という運びとなった。

■天正10年（1582年） 5月

堺港に行くとは早速信忠殿が主だった諸將を集めて軍議を開いた。

「勝長、そなたの存念を聞きたい」

「はっ、長宗我部は伊予・阿波を手中に収めたばかりなれば、土地の者の心を掴んではおらぬかと」

「ふむ」

「なれば、あちらが土地の者の心を掴む前にこちらが各地へ攻めいるが宜しいかと」

「……つまり兵を分けるという事か？」

「はい、まず全軍で淡路を押さえ、そこを橋頭堡として高松、川之江、室戸へ兵を上陸させます」

「ふむ、皆はどうじゃ？」

取り敢えず俺の案を言つと、丹羽長秀、蒲生飛騨守氏郷、高山大蔵少輔右近は賛成し、筒井権少僧都順慶と阿閉淡路守貞征が反対した。反対の理由を纏めると、

「兵を分けるは愚の骨頂。ここは慎重に全軍をもって一箇所ずつ攻略すべし」

と言つ事だ。

兵を分散して不味いのは相手の兵力が判らないか、こちらより多い場合だと思ふんですが……。それに今回織田方は4万で長宗我部は多くても2万だし、早く攻め立てて相手の四国統一を阻止するのが目的だから問題無いと思いますよ、順慶さん。

そんな事を考えていると我等が主將の信忠殿が言葉を發した。

「順慶と貞征の言も一理あるが、上様より“一早く長宗我部を攻め立てよ”とお達しを受けておる。此処は勝長の策を採用する」

「ははっ」

やったね、俺の案が採用された。順慶と貞征も自分の慎重論が退けられたが親父様の名がでれば服従するしかない。

皆が従う事を確認して次に信忠殿は各軍勢の指揮を決めていった。

「此処でそれぞれの軍勢についてだが、川之江方面には儼と長秀で1万5千、室戸には順慶と貞征で1万、高松には勝長に氏郷と右近で1万5千で攻め入る事とする、良いな！」

「ははっ」

こうして四国への長宗我部攻めが始まった。

■天正10年（1582年） 6月

暇だ！ 何かやる事無いですか？

信忠殿率いる川之江方面は、初戦で長宗我部勢1万を後退させて伊予方面へ進軍しているようだ。順慶率いる室戸方面は、長宗我部の別働隊8千と対峙して一進一退しているようだ。

そして俺は各方面軍への補給と讃岐・阿波の維持をしているのだが、すべて働き者の家臣達がやってくれているので正直やる事が無い。

そんな訳で俺は今、氏郷と将棋をしている。

「信忠殿は既に湯築城（現 愛媛県松山市）を攻めようとしているとか」パチっ

「成程、流石は信忠殿ですね（その桂馬を取られると…）」パチっ
「室戸方面は苦戦しているとか」パチっ

「最初から慎重論を発しておりましたし、少々弱腰になられたかな？（よっしゃあ、銀を奪えたぜ！）」パチっ

「そうかもしれないな、王手にございます」パチっ

なぬ、これで5勝6敗8分で負け越しになってしまった。

「氏郷殿、もう一戦、お相手願えるか？」

「喜んで」

平和だ。親父様、讃岐は平和でございます。早く美濃に帰らせて下さいませ。

第十八話 土佐の蝙蝠〜四海兄弟〜（後書き）

平和です。

長宗我部もサクッと終わらせませう。長宗我部ファンの人、すいませう。

第十九話 山城の激震―暗中模索―

■天正10年（1582年） 7月

暇です。そして……信忠殿の活躍が大きく長宗我部は土佐一国にまで減退しました。

そして今、俺は他の織田諸将と共に長宗我部の居城・岡豊城（現高知県南国市）の大広間に居る。

「長宗我部宮内少輔元親」

「ははっ」

「長宗我部は織田の配下となる。良いな」

「……ははっ」

上座に座る信忠殿が下座の元親を始めとする長宗我部家家臣一同に向けて臣従の誓いをさせているのだが、この岡豊城自体が鉄砲やら大砲やらの名残が酷い……補修するより新築する方が早いのではないだろうか。

「長宗我部の所領だが、土佐と伊予の2力国とする」

「……はっ」

「また、嫡男の信親だが……」

（えっ、嫡男を人質取るの？ 可哀想だよ、次男か三男ぐらいにしてあげようよ）

「我が弟、勝長に仕えさせる、良いな」

「……はっ」

（……今何て仰いました、兄上。俺の下にって言いませんでした？ 嫌です、長宗我部の家臣達が異様な目付きで俺を見てくれています！ 誰か助けて下さい！ 平和バンザイ）

「勝長、良いな」

「…はっ。信親殿、貴殿とは歳も同じ故、胸襟開いた仲になりたいと存ずる。宜しく頼む」

「ははっ」

信忠殿の通告に従い、俺が信親に言葉を掛けると信親は神妙な態度で返事を返してきた。

親父様と言い、兄上と言い、どうして厄介事を俺に廻すんだ。…嫡男って次期長宗我部家当主って事だろ！　もう少し丁重に扱ってやれよ！

■天正10年（1582年）　8月

阿波・讃岐は一時的に丹羽長秀が城代となつて長宗我部を監督する事になったので、俺は改めて美濃に帰ってきた。

未決の書類や報告が山積みとなつてました……、長期の戦にならなくて良かった。

というか羽柴や明智は長期に中国攻めしてるけど、“お役所仕事”はしなくて大丈夫なんだろうか？　などと他愛も無い事を考えていると、

「殿お、一大事にございます」

何だ？　頭から煙が沸いてますよ、猛暑でやられちゃいましたか？

何が一大事なのか判らないので書類の裁決をしながら聞いていたら家臣が怒り出した。

「何を暢気に書類など！」

“書類など”とは心外だな、これも大切なお役目だぞ」

「ええい、今はそれどころでは御座いませぬ」

「……だから、一体何があつたのじゃ」

「……上様が、上様がお倒れになりましたっ」

「はあああ？ 何を寝ぼけた事を……」

「真にございます」

あの親父様が倒れた。むう、確かに一大事だ。まさか“本能寺の変”は無いとは思っていたが、まさか倒れるとは……。何と言ってもこの織田家は親父様でもっている部分が大い、幾ら兄上が健在でも他国が攻め入る口実になり易い。さあ困った、困った。

「……困ったな」

“困ったな”では御座いませぬ、急ぎ安土へ赴かねば！」

「まあ落ち着け、それで上様のご容態は？」

「はっ、卒中との事に御座いまする」

卒中か……。最近怒りっぱかったからな、おまけにこの暑さでは仕様が無いか。

「それで、上様の近くには兄上が付いているのじゃな？」

「はっ、信忠様の他に堀左衛門督秀政殿と森成利殿（乱丸の事）がお付きとの事に御座います」

「そうか、ならば一安心だな」

“一安心”では御座いませぬ、殿も安土へ向かわねば……」

「俺は行かぬ！」

「……はあ？」

「……何を豆鉄砲を喰らったような声を出して……。まあ良い、俺は美濃を動けぬと言っておる」

「しかし！」

「しかしも案山子も無い！ よう考えてみよ！ 唯でさえ織田家の支柱が倒れたのだぞ！ 他国にとって絶好の攻め時ではないか！そしてこの美濃に関しては信濃から武田家が参ってくるかも知れぬのだぞ！ その時に将が居らねば如何する！」

「……なれば、殿は如何なさいまする？」

「文を送る」

「文……でございますか」

「そうじゃ！　まずは伊勢の一益へ“上様の容態について詳細を柴田、明智、羽柴、丹羽の諸將に知らせよ”と送る。その後、尾張の信張殿と信包殿に“徳川が攻めてくるやもしれぬから、尾張から離れないで下さい”と文を出すのじゃ！　無論美濃の諸將にも同様の文を送る」

早速、祐筆に文を書かせてその都度花押を書いてから、早々に諸將へ文を送ってもらった。

「後は……義春と信親じゃな」

「義春殿と信親殿ですか……？」

家臣に呼ばれて義春が来た。何かそわそわしている。俺の感が当たった様だ。

「義春、至急そなたに頼みたい」

「わ、私に御座いますか、して御用とは？」

「うむ、武田へ文を書いて貰いたい」

「……」

「此度、我が父が危篤となった事、伝えるはずであろう」

「……なぜそれを」

「そなたが武田家へ何度も文を遣わせている事、存じておる」

「……」

「その文に“織田家中至つて無事、騒ぎ出すもの無く美濃も落ち着いている”と添えておけ！　良いか、正確な情報を送れ、でなければ織田だけでなく武田にも流さなくて良い血が流れる事になる」

「……本当にございますか」

「ああ、既に美濃・尾張の諸將に“動くべからず”と既に文を出し

た故な」

「……判りました、……それがしはもうお役御免ですか？」

「何を馬鹿な事を！ そなたが居らねば新たに武田より遣いを寄越して貰わなければならぬ！ そのような面倒事こそ御免じゃ！ それに何ゆえ源三郎が悲しむ顔を見ねばならぬ！」

「……有難き、エグツ、幸せ、エグツ、にござ、エグツ、います！」

大の男が昼間っから泣くなよ！ ああゝ鼻水垂らして汚いな。

義春が一段落したところに信親がやって来た。

「勝長様、お呼びと伺いましたか？」

「ああ、長宗我部の家に至急文を出して貰いたい」

「……して内容は？」

「織田の家は揺るぐが倒れるまでには行かず」

「……はっ」

「安心せよ、例え倒れても長宗我部には悪いようにはせぬ」

「ははっ」

まっ、これで武田と長宗我部が大人しくしてくれば良いが、問題は西の毛利と東の徳川かな。毛利については俺知らね、羽柴と明智で何とかするだろ、って言うかして貰わんと困る。

後、何か俺に出来る事ありますか？

第十九話 山城の激震―暗中模索―（後書き）

次話以降からはサブタイトルの通りというか作者と同様に主人公にも暗中模索というか四苦八苦してもらおうと思います。

第二十話 三河の古狸ゝ悪事千里ゝ（その1）

■天正10年（1582年） 8月

やっぱりというか案の定というか……徳川が尾張に攻め入ってきた。本来は慎重な人のはずなんだが、やはり四方を他家に囲まれてしまつてはこの転機を利用したくなるのかな。頑張つて武田と織田に良い顔してれば、楽しい内政三昧の日々を過ごせるのに…。

そんな訳で、俺は織田勢（美濃・飛騨・尾張・北伊勢）の4万を従えて、尾張と三河の国境に流れる逢妻川と境川の西に陣を敷いている。対する徳川勢も川の東に位置する刈谷城（現 愛知県刈谷市城町）に1万2千を入れている。

そして今、織田勢の諸將を集めて軍議を開いているのだが、相変わらず好戦派の森長可が喚いている。

「我が方は敵の三倍、ここは打って出るべし」

「武蔵よ（長可の事）、確かに数の上では三倍じゃが、川を渡つての戦となるはずいのお」

「うむ、渡河の最中に矢玉に狙い撃ちされては適わぬ」

流石は織田家中の御意見番、ゴホン親族重臣の信張殿と信包殿だ、戦好きの馬鹿を手懐けるのが達者でございます。

「ええい、勝長様、それでは何時になったら打って出るので御座いますか!？」

「暫し待て（あゝ）煩い。それにしても督が可哀想だ、旦那と父親が戦うんだから。“登久姫と熊姫にはキチンと私から言っておきますから、安心して働き下さい”とか気丈に振舞つて見送ってくれたけど、やっぱり辛いだろうな」

「暫しとは何刻程にございまするか!？」

「……明日は雨かな？（もお、ホントにコイツ煩いな。一緒に歌おうよ、アゝメヨ、降レ降レゝって）」

「何を悠長なつ、さては徳川の名に怖気付きましたな！」

俺に無視されたと気付いた長可が鼻息荒く席を立てて今にも俺に殴り掛かるうとしてきた。

「長可、総大将に向かって何事ぞ！　少しは黙って言う事を聞かぬか！」

「左様、もう少し大人になれ」

信包殿、そして信張殿、大人の対応有難う御座います。流石に鬼面の長可が間近に來られて少しビビりました。

それにしてもまだ動かぬな、家康殿。地団駄を踏んでいる姿が目には浮かぶようだ。

所変わって徳川勢はというと……

重臣の井伊兵部大輔直政と本多中務大輔忠勝が主君・家康に詰め寄っていた。

「殿、相手は子供が率いる軍勢。唯でさえ弱兵の尾張兵を戦を知らぬガキが指揮を執っているのです。此方が負ける相手では御座いませぬ」

「左様です。ここは兵部の申す通り、打って出ましようぞ」

「……（ええい、武田は何故動かぬのじゃ）」

「殿、御下知を！」

「ぐつ、ええい、煩い！」

本当は今にも攻めたい家康であつたが、手勢の少なさが気になり中々下知を下せずに居ると、普段は慎重な鳥居彦右衛門尉元忠が井伊達を擁護した。

「殿、殿のお気持ちは重々承知してござれど、兵部や中務の申す通りにしてみても如何でしょう」

「なぬ、…そなたまで何を言うか！」

「…幸い明日は雨のようで御座いますな。相手には我等が近づく事は勿論、例え気付いたとしても鉄砲は使い物になりませぬ」

「……判った明日、出陣じゃ！」

「…ははっ」「」

所戻つて織田勢……

「殿、刈谷城から多数煙が上がっております！」

見張りからの知らせが来た。出来うる限りの準備はしてきたつもりだが、大丈夫だろうか。

「いよいよか…、皆の者、気を引き締めよ！ 信包殿、準備は如何か！？」

「はっ、すべて滞りなく！」

「なれば徳川の攻め入りに合わせて此方も尾張を守り通すぞ！」

「…ははっ」「」

一夜明けて徳川勢では……

井伊直政が手勢に向けて檄を飛ばしていた。

「由、これより織田の奴等へ打って出る。今まで我等をタダ働きさせてくれた礼をしに参るぞ！」

「…おおっ！！」「」

井伊隊に続き鳥居、大久保、本多、菅沼、平岩、石川の各隊が後に続いて渡河を開始する。

暫くして徳川勢の半分近くが渡河し終わったところで、織田方から『ドーン』と太鼓が打ち鳴らされた音が聞こえると異変が起こった。

ゴゴゴゴッ

「何じゃ、これは」

「殿、一大事に御座います。川が、川の水位が増しておりますっ」

「何じゃとー!」

所戻って織田勢……

「上手くいったようにござるな」

「左様、何も槍や鉄砲だけが武器ではござらぬで」

信包殿と信張殿が『茶飲み話』でもしているように不敵な笑みを浮かべながら会話を交わしている。

顔には出せないが……怖いです。叔父さん、アンタ達怖いよ。

信張殿の指示で10日程前から上流を堰き止めてあり、更に今日の雨が重なり、境川は氾濫の一途となっている。これでは重い甲冑を着ている歩兵は一溜まりも無い。

渡河の終えて退路を絶たれた徳川勢を川に押し戻すだけで概ね戦は終わったのを見て信包殿が俺の方をチラッと見て進言してきた。

「勝長殿、次の手もありますが無知しますか？」

「信包殿に任せる。（何気にその笑い方、怖いよ）」
「はっ」

『ドーン』『ドーン』

二度太鼓が鳴らされると、渡河前の徳川勢の横腹に織田の伏兵（北から典通が率いる稲葉勢1千と長可率いる森勢1千5百、南から元助率いる池田勢1千5百と信親率いる長宗我部勢1千）が攻め立てた。

これによって平岩、石川勢が打ち減らされていく。

この戦で井伊直政を始めとして鳥居元忠、大久保治部大輔忠隣、菅沼織部正定盈、石川長門守康通が討ち取られ、本多忠勝と平岩親吉の両名が手傷を負って逃げ帰った。

長可も典通も戦馬鹿だから少しは落ち着くかな。……………アイツ等、“岡崎城（現 愛知県岡崎市康生町）まで打って出よう”なんて言わないよね。今回の戦は怖い事ばかりだからもう美濃って言うか茶々のもとに帰りたいんですけど…。

第二十話 三河の古狸ゝ悪事千里ゝ（その1）（後書き）

戦シーン……少しは上手く書けたでしょうか？
やっぱり下手だ！

第二十一話 三河の古狸ゝ悪事千里ゝ（その2）

■天正10年（1582年） 8月

家康が岡崎城まで退いた。

森長可などは“これを機に三河の地を奪い、徳川を滅ぼしましょう”などと息巻いているが……さて、如何したものか。

徳川勢も当初の1万2千から7千にまで減っていると斥候からの報告を受けているが、攻めるなら今だろうな、多分。

しかし、まだ徳川には遠江まで下がる手が残っているし、浜松城（現 静岡県浜松市中区元城町）には無傷の4千の兵が居ると聞く。

如何したものかと一人で悩んでも仕様が無い。此処は先人の知恵を頼ろうと思い、横に居る信張殿に聞いてみよう。

「信張殿、攻めるか引くか、貴殿なら如何する？」

「左様ですな、それがしなら攻めまする」

「ほう、その場合は三河の奪取ですか？ それとも徳川の撃滅ですか？」

「今なら徳川を攻め滅ぼせるかと……」

「ふむ、徳川の後ろにはまだ遠江と無傷の兵4千が残っておりますが？」

「何も此処に居る織田の兵だけで事を済ます必要は無いかと存ずるが」

「と言うと……」

「遠江は海と山から攻めてみては如何でしょう？」

「……成程な」

流石に紀州の雑賀攻めで活躍しただけの事はある、俺には信張殿の

知恵に到底敵わないだろうな。などと感慨深く思いにふけると早速文を二通書いて送った。

■天正10年（1582年） 9月

文の効果は絶大だった。

まず一通は武田家に送った。内容は“今なら遠江がから空きの為、民を守る人が居ないみたいですよ”って書いてみた。そうしたら、“民を無下にするものに領主の資格無し”って大声で叫びながら甲斐・駿河・信濃から3万の兵が遠江を席卷して、僅か一月で主だった城を押さえていった。まあ浜松城以外は城兵はごく僅かだったから数日で落とされたようだ。

次にもう一通だが、これは伊勢・志摩に居を構えている九鬼大隅守嘉隆に送った。文には“三河と遠江の境、吉田城（現 愛知県豊橋市今橋町）を攻めよ”と書いた。

そしてこれまた予想外の活躍を見せてくれた。三河湾の海上から大砲をこれでもかって程にぶっ放し、城郭をスタボロにした後に九鬼勢2千5百によって半日で開城させてしまったのだ。

後で嘉隆本人に聞いたところ、

「周りは皆、戦をしているのに当家だけ暇だったから」

だそうだ。張り切るのは良いが、“暇だったから”って……俺も人の事は言えないか。

そんな訳で後が無くなった徳川が当主の家康自ら降伏を申し出てきた。

「当家は織田様に降伏いたします」

「……」

「なお人質として当家嫡男の信康を出させて頂きます」

「……」

「また、当家は今後、織田様に対して絶対の忠誠を持って粉骨働かせて頂きます」

「……」

「おお、時に我が娘の督は息災でございますか？」

家康が平身低頭して俺に忠誠を誓うと言ってくるのだが……正直信じられない。一度織田を裏切り、どう見ても腹に二物も三物も抱えている御仁だから、信じろっていう方が難しい。

更に此処にきて肉親の情を出してまで、生き延びようなど、死んでいった者たちへの侮辱以外何者でもないと憤りを感じてしまう。

「……温いな」

「えっ」

「……一度織田を裏切った者をまた信じる程、当家は酔狂ではござらぬ、また肉親の情に訴えるなど言語道断！ 当主は斬首、また此度の短慮を諫言出来なかった罪として嫡男は切腹を言い渡す！」

「なっ」

「更に徳川家の家督は次男・於義丸（おぎまる 後の秀康）に継がせ、三河一国は於義丸の物とする。また、人質はその於義丸とする」

「……」

「引っ立てよ！」

「……これまで徳川をタダ働きさせてきた恨み、何時かこの報いは返ってくるぞ、小童！」

ちょっと厳しい処置かな、と思ったが俺の両脇に座っている我がご意見番になりつつある信包殿と信張殿を見ると軽く頷いてきた。

他の織田諸将も特に異論がなさそうなので上手く裁定出来たとしておこつ。

こうして家康は引つ立てられ、市中引き回しの上、矢作川の川原で斬首となった。また嫡男信康も岡崎城の一室で切腹した。

ああ、督や登久姫、熊姫に何て言おう。実の父親と祖父を殺したんだもんな、きつと嫌われるんだろうな。悲しいな、戦国つて。

■天正10年（1582年） 9月

三河の徳川に対する仕置きが終わると俺達は遠江との国境にある浜松城に向かった。武田家との領地に関する取り決めはしっかりとやっておかないとね。

浜松城の城主の間に赴くと、上座に勝頼殿が座っており、そこから下座に盛信殿以下武田家のお歴々が鎮座していた。

何か背中がムズムズするが、気を引き締めて俺が勝頼殿の隣に座ると同時に勝頼殿が話を始めた。

「御坊、息災か？」

「はい、勝頼殿」

「殿…か、まあ良い、して領地についてだが」

勝頼殿が感慨深く呟いた。ふと脇を見ると盛信殿も何か寂しそうな顔を一瞬見せた。だが、此処は事務的に接するべきだ、何故なら相手は他家の当主代理であり、俺も織田の当主代理としてこの場にいるのだから。

それにこの会談の是非によっては要らぬ血が流れないとも限らないため、失敗は許されない。

「はっ当家は三河を頂きます故、遠江以东を好きにされたら宜しかと」

「ふむ、徳川への仕置きは聞いておる。少々厳しかったのではない

か？」

「…それがしが見るところ、家康殿は天下に類を見ない狸でござる。なれば野放しにしておけば何を謀るか分かったものでは御座らぬゆえ」

「……左様か」

「……」

領地については武田家の思惑とも合致したと見ていいのかな、そして家康についても。もし家康を惜しんだのであれば、徳川が武田家に靡いた時に手元に置いていた筈だから。

「話は変わるが、松と義春は息災か？」

「はい、松姫様は今も我が兄・信忠殿の正室として安土でご健勝でございます。義春も我が軍の陣中にて留守番をしております、何でしたら呼びますが」

「いや、その儀には及ばぬ。息災ならそれで良い」

「はっ」

「……もう昔のように往かぬな」

「……かもしれませぬ」

こうして、浜松城での武田家との会談は終わった。領地についても此方の希望通りとなったので良しとしよう。でも、やっぱり悲しいな、戦国って。

第二十二話 三河の古狸（悪事千里）（その3）

■天正10年（1582年） 9月

徳川との戦の後始末も終わって美濃に帰ってみると家族が出迎えてくれた。特に督は気丈に、そして登久姫と熊姫は何とも言えない顔で出迎えてくれた。

「無事のお帰り、お待ち申しておりました」

「うむ、皆息災で何よりだ」

幾ら戦国の世とはいえ、本音では辛いだろうな。やっぱり俺がしつかりと三人と話し合つとかないといけないだろう。

「督、そして登久に熊、何故そなた等の父であり祖父の家康殿が織田に弓を引いたかは判らぬ。しかし俺はこの美濃の民の暮らしを守る義務がある」

「……はい」

登久姫と熊姫が目には涙を浮かべて、今にも零れ落ちそうだ。

「登久に熊、今は判らぬでも良い。されど、我等がこの美濃で笑って暮らせているのも全て此処に住む民のお陰だという事は知っておいてくれ。そして、もし俺が民を苦しめたりしたら、迷わず討て！
良いな」

「……はい（グスンッ）」

あゝ、遂に子供達が泣いちゃった。ここは男として慰めねば！

「泣くな、出来る限り民を苦しめたりしないように俺自身も気を付けるから、ねっ」

「……はい」

「それに俺はそなたらの笑顔が好きだから、なるべく怒らせたり、困らせたり、間違つても泣かせるような事はしないと、皆に誓うからさ」

「「はい」」

「…そうだ、これよりそなたらと共に生活する於義丸^{おぎまる}じゃ」

俺は場の空気を変えようと、脇に不安そうにただずんでいる於義丸を前に出した。

「督にとつては弟、登久に熊にとつては叔父にあたる訳だが…於義丸、挨拶せよ」

「…はい、於義丸です。宜しくお願いします」

うん、少し硬いけど、好い挨拶です。ただ俺の子供達に手え出すなよ！ もし出したらぶっ飛ばす！

こうしてまた新たな家族が増えた訳だが、それにしても……女の子の涙は卑怯だ！

■天正10年（1582年） 9月

俺が美濃に戻って数日が経ったある日だった、その一報が舞い込んできたのは……。

「殿、一大事に御座いまする」

「何じゃ騒々しい！ “廊下は走るな”と教わらなかったのか」

「殿、それ所では御座いません」

「ええい、“煩いと物置小屋に閉じ込めるぞ”と親に叱られるぞ！」

「殿！ 上様が、上様の意識がお戻りになりました」

「……………えっ」

その報を聞くや俺は自分の言った事を忘れ、廊下を走りながら“馬を用意しろ”と大声で叫んでいた。

安土に着くと直ぐに親父様の部屋に通された。親父様は半身を起こ

しており、その脇を兄上（信忠殿）の他に堀秀政と森成利、そして滝川一益が固めていた。

「ご……ご、御坊、そ、そ、息災か？」

部屋に現れた俺に気付いた親父様が声を掛けてくれたのだが、口が上手く回らないようで言葉がたどたどしい。

「はい、上様のお陰に御座いまする」

「せ、世辞は、よ、良い」

口は回らぬが目は以前と同じだ、嘘や上辺の言葉を制する鋭さがある。

「はっ」

「みか、三河、の事は、き、聞いた。祝着じゃ」

「はっ」

ここまで話が進んだところで堀秀政が話を引き継いだ。

「勝長様、此度のお働きがあればこそ東海道が守られました事お慶び申し上げます。それを踏まえまして勝長様には現状の飛騨・美濃に加えて、尾張・三河・伊勢・志摩の仕置きをお任せする旨、上様より仰せつかっております」

「……はっ」

「これよりは滝川殿や信包殿、信張殿を始めとする東海諸将を従えてのお働きをご希望との事」

「はっ」

「織田家のため、益々のお働きをお願いいたします」

「ははっ」

親父様が元気そうで良かった。体はまだ弱っているが、目に力があるからそれで十分だ。

それにしても、は、六カ国の仕置きか……自信無いなあ。

■天正10年（1582年）10月

一気に六力国を治める事になった訳だが、配下武将の領地は殆ど変えずにそのままとした。“餅は餅屋”っていうし、今まで十分治めてきたのにわざわざ変える馬鹿は居ない。

今回の三河攻めに参加した諸将には金銀や茶器、駿馬や武具を与えておいた。皆喜んでいたから良しとしよう。（今回は信親達の長宗我部勢も働いてくれたから、彼等と四国の本家にも金銀を渡しておいた。とっても喜ばれた）

ただ一点、三河については、代官というか城代を送り込んで事にした。

「本当にそれがしで宜しいのですか？」

「構わぬ、信栄。本来であれば早くにそなたの父・信盛殿を招くつもりでおったが、間に合わず残念だ」

「はっ」

俺は今回の新領任命をもって佐久間信盛・信栄親子の罪を赦免してもらった。

当初は堀秀政が渋い顔をしていたが“部下が足りない、赦免が許されないのであれば新領は辞退したい”と言い張り、最後には親父様から“御坊の好きにさせよ”とお墨付きを貰った事で佐久間一族を召抱える事に成功した。

「そなたには三河に行つて貰う」

「三河でございますか？」

「そうだ、彼の地は未だ徳川に心服する民が多い。よってさじ加減が難しいが辛苦を知っているそなたなら上手くやれるであろう」

「…はっ、身命を賭して働かせて頂きます」

「うむ、まあそんなに硬く考えるな。今、三河で一揆やら乱が起くるのは頂けぬ。よって織田に不利益が生じぬ限り徳川の良いようにして貰って構わぬ」

「はあ」

「ただ如何に主君であり人質でもある於義丸が此方の手にあるとはいえ、戦国の世であるからには何があるか判らぬ。万一、徳川が再度織田に弓引く場合もあるかも知れぬ」

「…はっ」

「それに此度は此方に便乗して動いてくれたが、武田が後ろに控えておる故な」

「はっ」

「まあ、当面は徳川の内政を手伝ってやってくれ、この三河の地は長年一揆が乱発していた故疲弊しておる。少しでも“織田は敵では無い”と当地の民に判って貰わねばな。そなたには難しい采配を押し付けるようで申し訳ないが、宜しく頼む」

「ははっ！」

こうして各地の諸将への論功行賞と当面の指示を与えてゆき、東海の地はまた平穏を取り戻し始めた。

（これから俺何するんだろう？ まさか武田攻め？ いやいや、無い無い！ これ以上の面倒事は御免だ！ 俺は一日でも長くそして多く茶々や督たちと平和に家族団らんを過ごしたいんです）

第二十三話 四国の返還く以心伝心く

■天正10年（1582年）12月

茶々が懐妊した。やったー！ ばんざーい！ 嬉しいぞー！ と思
っていたら、督も懐妊した。二重の喜びです、皆さん！ 我が世の
春です、何か大声で叫びたくなってきた。
三河から戻ってから頑張った甲斐があった。

懐妊してからは“滑って転んだら危ないから”って理由で一緒に風
呂に入る事を決めた。当初は“三人で入るのは…”と遠慮がちだっ
た茶々と督だが、此処は断固として引かなかったぜ、俺。

「ふう、良い湯じゃ」

「最近一段と寒さが増してきましたから。殿、お背中を流して差し
上げます」

「ああ、頼む」

「それでは茶々が前を洗って差し上げます」
「うむ」

茶々と督が競い合うように俺の体を洗ってくれている。これが男の
幸せってやつですか、……そうに違いない。

「茶々、正室なのに中々子宝に恵まれず、肩身の狭い思いをさせて
きたな。すまぬ」

「今が幸せであればそれで良いのです（ウフッ）」

「まあ、家を空ける事が多く、帰ってくる度に血の繋がらぬ家族を
増やしてきた俺が言うのもなんだが、よう家を守ってくれた。感謝
しておるぞ」

「はい、私一人では何も……督や皆がいてくれたお陰に御座います」
「そうか……督も、今年は何かと気苦労が絶えぬ一年であったが、

よう付いてきてくれた。有難う」

「督は既に織田の人間に御座います。よって他家の事は二の次、殿が無事で笑っていて下さればそれで幸せに御座います」

「……そうか」

うん、女子というか母は強いな、俺なら泣き喚いている事だろう。

そんな日々を過ごしていると、我が家に贈り物が山のように届いた。茶々の懷妊を喜んだ親父様が全国に散らばる織田諸将に知らせた為だ。

俺の配下諸将だけでなく、親父様や兄上（信忠殿の事、…信雄と信孝は無視をこいてきた。もうお前等なんてプンスカプンっだ）、あと光秀や秀吉や勝家なんかもお祝いを送ってきてくれた。

嬉しいねえ、お返事書がなくちゃ！そして今日も俺はお祝いの返事を書いている。百通ぐらい書いたけど後何通書けばいいのでしょう？

■天正11年（1583年） 1月

今年も安土で新年の挨拶と評定が行なわれた。まだ親父様が全快ではないため、評定の進行は兄上様（信忠殿）が行なっている。

「勝家、北陸は如何じゃ！？」

「はっ、能登を取り、越前を始め加賀・越中ともに政も円滑にて、越後の上杉も当家に臣従しておりますので何時でも兵を挙げられます」

「よし」

（今年一年は能登を降した後は北陸全般の内政に励んだって所かな。当初は一向宗の残党が一揆を頻発させていたって聞くし、此処までくるのに大変だった事だろう）

「筑前（秀吉）、山陽方面は如何なっておる!?」

「はっ、思いの他に毛利が手強く、備中と備後を一進一退しております」

「むっ」

（昨年に宇喜多を此方に寝返らせたまでは良かったが、親父様の危篤による動揺に毛利が付け込んできたって言うし……まあ史実と違って親父様が健在だから毛利と和議を結ばないってのは大きいとしても、同じ兄弟の信雄と秀勝は何やってんだ、あまり役に立ってないというか逆に邪魔してるって風の便りで聞こえてきたぞ。あつ、親父様の眉間に皺が……クワバラクワバラ）

「日向（光秀）、山陰方面はどうじゃ!?」

「はっ、こちらは伯耆を取り、今年は出雲へ打って出る予定で御座います」

「うむ」

（此方も親父様の危篤による動揺に毛利の吉川勢が勢いを増してきたって言うし……後、ウチの三男坊（次男?）の信孝が好戦的過ぎて戦略を見直した事が度々あったって聞こえてきた。何処に言っても『戦馬鹿』っているのね）

「五郎左（長秀）、昨年は四国の平定したこと重畳じゃ! その後は如何なっておる!」

「はっ、畿内の諸將の働きもあり讃岐・阿波は平穩を取り戻しまして御座います。また、長宗我部についても此方に臣従してからは協力的でございます」

「左様か。勝長っ!」

「はっ」

「東海筋は如何か!?」

「はっ、徳川は当主・於義丸（おぎまる）を人質に捕ってからには落ち着いており

ます。武田についても当方よりも東国に関心が強いのか此方に攻め入る気配を見せませぬ」

「成程、来年もそなたには働いて貰わねばならぬ。練兵に励め！」

「ははっ」

（俺、褒められちゃった。でも信雄と信孝が俺を蛇蝎のように睨んでくる。敵は味方にもって奴ですか、恨まれる覚えは無いけど…気を付けよう）

■天正11年（1583年） 1月

今日は信親の送別会。茶々を始め皆しんみりしている。

事の始まりは俺の一言だった。

「信親も美濃に来てから色々頑張ったし、長宗我部も織田に臣従してからちゃんと働いてくれてるみたいだし、土佐に返してあげよう」

この後、あちらの家老で信親の叔父にあたる香宗我部安芸守親泰と、ウチの好々爺の一益とが色々話し合って、“千熊丸（後の盛親）を代わりに連れて来るから信親は土佐に戻します”って事に決まった。……何か話し合いの途中で光秀が出張ってきたが（何でも長宗我部の現当主・元親とは親戚だから、俺も交ぜろって言ってたような…）、ウチの大人達（信張殿と信包殿）が“そなたは毛利攻めで忙しかろう、此処は我等に任せて、山陰に帰られよ”って感じで追い返した。なんでか知らんけど、俺、光秀に恨めしそうに見つめられました。

（……後々の事も考えてよ、オジさん。もう少し角が立たないようにさあ）

そんな訳で、信親が最後の挨拶を始めた。

「皆様から受けたご恩、この信親一生忘れません」

「風邪には気を付けて。この乱世ですから“ご無事で”とは安易に申せませんが、それでもお体を大切にするのでしょ」

「……はい（グスッ）」

茶々の壮行の言葉に涙ぐむ信親。

「男がメソメソするでない！」

「……これは雪が目に入ったので御座います」

俺のツツコミを雪の所為にする信親。

「道中の水にはくれぐれも気を付けて下さい」

「……はい（エグッ）」

督からの注意に感極まる信親。

「シャツクリか？」

「左様です！」

俺のツツコミに逆ギレする信親。

「……おにいちゃん、ばいばい」

「登久姫と熊姫も達者でな、義母上様（茶々）の言う事はちゃんと聞くのだぞ」

登久と熊からのサヨナラに応える信親。

「俺の言う事は聞かんでも良いのか？」

「……」

俺のツツコミを無視する信親。

「それでは殿、短い間でしたがこのご恩、信親がいる限り長宗我部は忘れませぬ！」

「……また共に戦場を馳せる事もあるかも知れぬ。その時まで壮健であれ」

「ははっ」

信親が去っていった。これでは義春と於義丸か、無事に家に帰してあげたいものだ。……あつまう直ぐ信親の弟の千熊丸が来るんだ。素直な子なら良いな。

第二十四話 信濃の苦渋、勇往邁進（その1）

■天正11年（1583年） 2月

千熊丸が当家に来て早や一月が経った。やっと当家に馴染んだのか元気にしている。

先に来ていた於義丸おぎまると一歳違い（於義丸は天正2年生まれ、千熊丸は天正3年生まれ）だから仲が良い。昔の俺と源三郎（我が悪友の武藤信幸）を見ているようで微笑ましい。

「於義丸殿、待ってよ」

「千熊丸、静かにせよ」

「何があるの？」

「しいゝ！ 登久が湯殿に入ってる。此処から見れるからそゝっと見てみるよ」

「……（赤面）」

何してんじゃ、この糞ガキ共！ 可愛い娘に何してくれてんじゃ！ 教育が成ってない、俺はこんな“マセガキ”に育てた覚えは無いぞ！ もうお仕置きです、フルボッコ確定です、便所掃除もおまけにつけてやる！

俺は松姫様や菊姫殿の入浴は盗み見てないぞ、見れたのは源三郎だけだ！ 俺は何も悪くない、にも拘らず盛信殿に鉄拳を浴びせられただけだ、源三郎と共に…。

■天正11年（1583年） 2月

春も間近になって柔らかな日差しが射すようになった今日この頃です。

俺は久しぶりに『杖が似合うようになってきた親父様』に呼び出されたため、安土の城に出向いた。

「上様、お体が良くなったようで何よりです」

「うむ、今日そなたを呼んだのは他でもない」

「はっ（未だ後遺症が残って、左足が動かないようだが、言葉の端々からもう顔の麻痺は取れたようだ、良かった）」

「武田を攻めよ！」

「……は……あ？」

「聞こえなんだか！？」

「いえ、聞こえました」

「ふむ、権六と上杉の4万は上野を、彦右衛門（一益）には伊勢・伊賀・志摩の手勢1万7千で駿河から甲斐を、又六郎（信張）と三十郎（信包）には尾張・三河の兵1万2千によって遠江から信濃を攻めさせる。そなたは美濃・飛騨の手勢1万5千を従えて信濃から甲斐を攻めよ！」

「……はっ」

「不服か？」

「いえ、承りまして御座います。して、総大将は誰が？」

「東海筋はそなたに任せたはず！ 話は以上じゃ」

「ははっ」

まさか俺が武田家を討つ日が来ようとは……。戦国の世とはいえ松姫様も実家が嫁ぎ先と争う事になるうとは気が気では無いだろう、そして上杉に嫁いだ菊姫殿も……。

憂鬱だ、気が進まないって不貞寝したいけど許して貰えるだろうか……あの元気になった親父様では無理だな、そもそもこの時代に現代病の鬱って通じるんだろうか……。

■天正11年（1583年） 3月

あせりは禁物とは判っているが、どうしても逸る心が先行しがちになる。今も家臣に別働隊の進行状況を聞き出している。

「柴田の北陸勢は何処まで進んでいるか？」

「はっ、何分まだ雪が溶け切っていないように思うように進めておらず、越中と越後の国境との事に御座います」

恐らく上野・武蔵の兵3万5千が相手となるから越後一国の手勢では手に余る。やはり北陸勢が集結してやっとな戦に持ち込めるだろう。

「信張達の尾張勢は？」

「はっ、漸く三河に到着されたとの由。まだ三河では兵農分離が進んでおりませぬ故、三河の兵が集まるまで今暫く掛かるかと…」

「左様か」

武田はまだ遠江を手に入れてから時を要していないため、武田の方が兵の集まりは鈍いはずだからそこが狙い目だ。

「一益達の伊勢勢はどうじゃ？」

「其方はまだ志摩に集結中との事。何分兵の数も多く更に船の手配も御座いますので、集まり次第に随時出航させているようですが全軍とまではいつておらぬと聞いております」

「ふむ」

武田家は未だ水軍が充実していないし、鉄砲は少なく大砲に至っては保持していないはずだから、此方に分がある。後は駿河に上陸してから仕置き次第だが、一応一益には“略奪暴行は後々の統治の妨げとなるため無用”と言っておいたし大丈夫だろう。

いくら東海筋を任せられ、更に此度の総大将となろうと彼らは俺の家臣でも直臣でもない。あくまでも俺と同じで織田家の家臣であってタダ俺の寄騎となってくれているだけだ。そこを忘れない

でおかないと後でおかしな事になるから気をつけよう。

それにしても俺達美濃勢が一番乗りできそうだ。ただ、武田も此方に注目し易くなるから敵兵も増えるだろう、苦戦が予想される。

武田の城を一つずつ落としていくのも馬鹿らしい。懐柔や臣従を勧めつつ、それが無理なら進軍経路にある岩村城（現 岐阜県恵那市岩村町）と飯田城（現 長野県飯田市追手町）に集めさせての攻城戦に持ち込むとしよう。

■天正１１年（１５８３年） ３月

岩村城に到着した。此処は元々俺の城になるはずだった、阿呆の義母が何処ぞの男（秋山伯耆守信友）に誑かされて武田に鞍替えしたのである。

史実では天正３年に開城されているが、長篠合戦で両軍痛み分けとなった事で未だ武田方となっている。

今回、俺が遠山本家の継嗣である事を利用して遠山一族を此方に懐柔する事に成功したため、岩村城の裏道や弱点などの聞き取りを行って城を丸裸に出来た。此方は遠山勢を加えて１万６千、相手は１千５百だから余程の事が起きない限り勝負は見えている。

「殿、城方から降伏の使者が参っております」

「会わぬ！」

「しかし、使者が申すには“義母を助けよ”とお艶の方様が申しておるそうですが」

「今更“親族の情”に媚びるなど言語道断！ 会わぬといったら会わぬ！」

「ははっ」

美濃から武田の名を消すためにも此処は断固たる態度が肝要だ、降

伏などされて厄介事を後方に残しては進軍に差し支える。

それに徳川攻めの時もそうだったが、俺は戦の情勢が決してから“親族の情”を持ち込に媚びる奴が大嫌いだ、そんな事を思うなら戦が始まる前に片付けろ！ 共に命を賭けて戦に挑んでいる家臣や僚友に失礼だ。

更に言うなら、何が“義母”だ！ 母なら敵将に尻を振らずに子を守れ！ 俺のこれまでの境遇の発端を作った奴が何を今更、馬鹿にするのも大概にしろ。

こうして岩村城に居た総ての武田方が討たれ、遠山本家の居城だった場所は廃墟となった。

続いて岩村城を落とした美濃勢は一路飯田城に攻め込んだ。此処は伊奈郡代だった秋山信友が改修して堅固な平山城となったが、その秋山ももう居ない。

また飯田城の城代・保科正直は織田方の軍勢を見るや、城を捨て兵を纏めて甲斐に向かった。

武田勢が集結し始めている……出来れば大軍での決戦には持ち込みたくないな、混戦は何が起るか予想が難しいだけに嫌いだ。

第二十五話 信濃の苦渋と勇往邁進（その2）

■天正11年（1583年） 4月

飯田城に1千の兵を残して、天竜川沿いに三州街道を北上していた美濃勢に新たな報せが入ってきた。

「此处から更に北に13里（52Km）程にある桑原城（長野県諏訪市大字四賀桑原）へ武田勢8千が入り、我等を待ち構えているとの事にござります」

無視したい所だが進軍の通り道に布陣されれば、戦う他無い。

「相判った、伏兵に気を付けつつ軍勢を進めよ！」

「ははっ」

所変わって桑原城……

評定ではまず主将で武田信玄の異母弟の河窪信実が口を開いた。

「相手の織田勢は1万5千、当方は信濃勢の六割強の8千……兵数の差はおよそ二倍か。この兵力差を如何に打開するか、皆の意見を聞きたい」

「いつその事、残りの4千も当地に集める事は出来なんのですか？」

「それは無理じゃ、織田は駿河へ1万7千、遠江へ2万2千の兵を差し向けたと聞く。甲斐勢6千5百だけでは後詰にもならぬ」

土屋右衛門尉昌恒が兵の追加を提案するが、横田尹松によって退けられた。

ここで駒井右京亮政直が手を挙げて発言し始めた。

「織田勢は諏訪湖を左手に見ながら此方に進軍して来ると思われま
する」

「だからどうだと言うのじゃ！」

政直の言が要領を得なかったのか初鹿野信昌が苛立ちを露わに激昂
した。話の腰を折られた駒井はムツとした。

「まあそんなに先聞いてからにせよ、駒井続きを聞かせよ」

信実が小幡を嗜め、駒井を宥めつつ先を促した。

「はっ、であれば当方からみて右側からは攻められる事は無いかと」

「正面から来る織田勢を抑えられれば相手の右翼に強襲出来出来
るな」

話の腰を折られて若干ムツとしつつ正面の信実へ説明を政直が説明
を続けると、曾根下野守昌世が後を引き継いだ。

「はい、1千5百程の兵を有賀峠に伏せておけば強襲は可能かと存
じます」

曾根昌世の発言が自分の考えと合致したのか、政直は満面の笑みを
今度は浮かべて話を締めくくった。

所戻って織田勢……

「勝長様、近隣に住む者に聞いた所ではこの高德寺より東へ近道が
御座います。いささか峠道では御座いますが、この森武蔵が先導し
ますゆえ其方へ進路を変更しては如何でしょう」

俺達が上伊那郡辰野の高德寺で一時の休息を取り、“さあ岡谷まで
もう少しだ、頑張ろう”と兵を励まそうとしようとするところに森
長可が嬉しそうに俺に進言してきた。

「……一鉄、そなたはどう思う」

「はっ、峠道との事ゆえ軍勢が縦長になります。そこを敵の伏兵に攻められては目も当てられない事態となる恐れがありますな」

「……恒興、そなたはどうじゃ」

「はっ、稲葉殿の言は一理あり申すが、伏兵が居るものと想定して行軍すれば問題無いかと」

長可は始め、俺が自分の進言よりも稲葉を優先したのが気に入らなかったのかムツとしていたが、舅の恒興が長可寄りの進言をしてくれたので機嫌を直した。

「ふむ（いつも長可を無視するのもなんだし、ここは乗ってやるか）
……判った峠道を進むとする」
「ははっ」「」

爆発でもされたら俺だけじゃなく他の1万以上の兵の命に関わるから危険だ。三度に一度ぐらいは長可の言う事を聞いてガス抜きしてやらないとな。

■天正11年（1583年） 4月

峠道の進軍は特に伏兵に襲われることなく進み、あと一息というところで1千5百程の敵勢を発見した。“発見した”というのは、どう言う訳か敵勢はこちらに背を向けて地に伏せていたためだ。

俺が指示を出す間を与えず、発見した途端にウチの特攻隊長の長可が敵勢に攻め入り、物の半刻で潰走させてしまった。

長可の事後報告によると“敵勢はなんか当方へ恨めしそうに反撃してきた”との事だ。松姫様だけでなく人質（義春）まで出させながら攻めてきたのだから織田を恨むのも当たり前かな。

峠道が終わり、漸く桑原城という所で左手の方角を見たら、諏訪湖を背後に武田の軍旗が靡いていた。

先程の先頭では物足りなかったのか、これまた長可が我先にと襲い掛かる。長可には“待つ”という言葉を教えてやらんといかん。

長可の手勢1千5百程に比べて武田方は6千程の軍勢だから、此方も増援を出さないといけないな。

「一鉄、恒興、それに秀長（河尻の方）、長可を助けよ！ 但し、伏兵や罠には気を付けよ！」

「……はっ」

相手は此方の半分の兵力しかないから、余程の事がなければ勝負は見えている。

そして、どう言う訳かまたもや敵勢はこちらに背を向けて地に伏せていたのだ。更にまたもや当方へ恨めしそくに反撃してきた。

敵に背を向けて待ち構えるのって最近の武田の軍法なのかな？ 俺が去った後の武田家が変わってしまった事に一抹の寂しさを覚えてしまう。

■天正11年（1583年） 4月

半数近くを討ち取られながら敵勢が桑原城へ落ち延びてから一日が経過した。

此方は義春を軍使に桑原城へ開城を申し出たが、無下に断ってきた。

「勝長様、如何なさいますか」

「うむ………夜を待つて火矢を打ち放て」

「ははっ」

もの凄い数の火矢を打ち込んだのもあるが、城が燃え易かったのだろ。う火は面白いように燃え盛った。

そして城方は予め無防備にしておいた搦め手から甲斐方面へと逃げていった。

「勝長様、追いつちを掛けなくて宜しいのですか？」

攻めたそつだな皆、でも駄目です。

「此処はまだ武田の領地ぞ！ 夜の追撃は何があるか判らぬ。それに此度の戦いで長可の手勢が思いのほか負傷した者が多い故、今は追いつちは無用じゃ」

周りの皆さんもしぶしぶ納得してくれ、長可も個人としては戦いたいが手勢が付いて来れないとなれば大人しくせざるを得ない。

「明日は城の鎮火を確認次第、進軍を再開する。武田は恐らく上原城（現 長野県茅野市茅野上原）か谷戸城（現 山梨県北杜市大泉町谷戸）にて待ち構えておろう。皆勝ち戦が続いて気が緩んでおろうが、再度気を引き締めよ！ 相手はあの武田なのだからな」

「ははっ」

■天正11年（1583年） 4月

各別働隊の状況が伝わった。

勝家率いる北陸勢は上杉勢と合流後、武田信廉殿を主将とする上野衆をじりじりと武蔵へ退かせているようだ。

武田側も内藤昌豊、昌月親子、横田尹松といった諸将が奮戦しているようだが1万5千の上野衆だけで織田の4万を相手にするのは至

難の業だろつ。

しかし盛信を主将とする武蔵勢2万と馬場信春、信頼兄弟、土屋昌続、小幡昌盛、武藤昌幸の武蔵諸将が加わってからは一進一退を繰り返しているみたいだ。

尾張勢については三河徳川勢と合流後、浜松城を落として現在は高天神城（現 静岡県掛川市下土方）に攻め掛かっているところだ。この城は高天神山に築かれた沢だがそれほど大きな山ではなく、城郭全体の面積もそれほど多くないが、山自体が急斜面かつ効果的な曲輪の配置が施されたこと堅固な山城との事だから城攻めは大変だろつ。

一益達の伊勢勢はやつと船隊が整い駿河湾にて武田水軍を撃退し、地上戦に突入したようだ。相手は穴山信君率いる駿河衆だが、兵力の差もあり勝ち進んでいるようだ。

一益達が勝っていれば穴山率いる駿河衆は遠江への後詰が出来ないから、此方の尾張勢も高天神城の攻略に集中出来る。

皆さん頑張ってるみたいですね、俺も早く武田家を降せるように張り切っちゃいますよ。

第二十六話 信濃の苦渋、勇往邁進（その3）

■天正11年（1583年） 4月

上原城はもぬけの殻だった。その代わり甲斐国境にある谷戸城に桑原城から逃げ込んだ兵を含め4千が入っているとの情報を得た。

武田側の考えも判らない訳ではない。甲斐と信濃の国境を越えられ甲州街道を南下され巨摩郡を抑えられてしまうと、もう躑躅ヶ崎館は目と鼻の先となるからだ。

また無抵抗に他国の兵に入られる事は国人領主たちが許さないだろうし、下手をすれば民心が離れる事となる。

とりあえず折角空き家になっているんだからという事で上原城で休息を取り、翌日、負傷兵を中心に2千の兵を上原城に残して我等1万3千は谷戸城へ向かう事にした。

谷戸城の造りについては二の丸と三の丸からなる城を土塁と堀で囲んだ典型的な丘城なのだが、三方が崖に面している事から攻城には向いていない。

あまり時間が掛かるのも考えものだが、正面から攻めるとどうしても此方の被害が大きくなる。

桑原城と同様に火矢を打ち放つ事も考えたが、城の造りが邪魔をする。三方が崖に面しているため攻城には向いていないが、逆に城方にとっても逃げ道を確保し難いのだ。

俺は出来る限り味方だけでなく敵も被害が少なくしたいのだ。何故なら被害が大きければ大きい程に怨嗟の聲が高まり、結果としてその後の統治に時間が掛かるからだ。

どうしようかと軍議を開いてみたが、相変わらず声が大きく強気な長可と、兵の被害を最少にすべく別の策を考えるべきと慎重な一鉄、そして強硬派と慎重派を仲裁する恒興。

森の一隊で攻め落とせる訳も無く、かと言って一鉄や恒興に別の策が見つかった訳ではなさそうだ。

「……そろそろ良いかな」

「“そろそろ”とは如何なる意味に御座いますか、勝長様」

俺がポツリと呟いた一言を聞きつけた恒興が訝しげに問い掛けてきた。

「桑原城と同様に降伏の使者を出す。そして此度は俺が使者となって城に赴こうと思う」

「なっ」

「いつ」

「なりませぬ、大將が使者となるなど前代未聞ですぞ！ 更に勝長様は此度の武田攻めの総大将に御座いまするぞ、そのような軽挙は認められません」

「左様、このような端城！ この鬼武蔵だけで蹴散らしてくれまする！」

俺の提案に皆が驚くとともに、一鉄が俺を諫め、長可が改めて攻城を申し出た。

しかし他に効果的な策が無い限りは俺も譲れない。

「何にでも初めてはあるものさ、それに孫子も“攻城は下策で最も避けるべき”と申しておるしな」

「しかしっ」

「長可よ、いつも森勢にばかり頼ってしまっでは申し訳ない。だがそれが度を越せば兵たちが可哀想だ」

「……」

「一鉄、長可がぐうの音も出ない策が無いのであれば、それは駄々をこねる童と同じぞ。恒興もじゃ」

「……はっ」

「武田も一廉の武家であるから使者を無下に扱う事はあるまい。それに伊達に甲斐で人質暮らしをしていた訳ではない、武田家には何人か知り顔もある。勝手知ったるなんとやらじゃ。まあ万が一俺に何かあれば恒興がこの隊の指揮を執れ、その内親父様が兄上様（信忠）辺りが助けに来てくれるだろう、ハハハっ」

こうして今回は義春を従者に俺が使者として赴く事となった。

■天正11年（1583年） 4月

「何い、御坊が、勝長がこの使者として参ったじゃと!？」

「はっ」

「むむっ」

「して、如何なさいまするか」

「……会おう。此处に連れて参れ」

「ははっ」

「……大胆なのか、ただの馬鹿か。この目で見定めてやる。それにしてもあの童が武田の敵となり帰ってくるとはな」

近習に会談する旨を伝えた河窪信実が一人遠くを見ながら遠い日进行い出していた。

■天正11年（1583年） 4月

「勝長殿、使者の役目大儀である。して此度は何用かな？」

上座に座っている河窪信実が俺を労うと、使者としての真意を問う

てきた。

周りの武田諸将は何時でも切りかかりそうな目付きで俺を睨んでくる。(うつつ、目で殺されそう)

「単刀直入に申す。此度、使者として伺ったのは開城をお勧めする為にござる」

「なっ、無礼な！」

「我等はまだ戦える！」

「武田を舐めるな！」

俺が開城を勧めると周りの諸将が片膝を立て刀に手を当てていきりたった。

「控えよっ！ 使者の前で見苦しいっ」

「しかしっ」

「控えよというのが判らぬかつ」

「…はっ」

城代の信実が一喝したことで、諸将もしぶしぶながら元の位置に戻る。

「して勝長殿、我等は何故開城せねばならぬのかな？」

「…桑原城から入られた兵は兵糧を共に持つて参られましたか？」

「ふむ…、多くの者は手ぶらで入ったようだな」

「それではこの城に今居る方々は早々に飢えてしまいますぞ」

「…この城にも多少の備蓄はあるが、この季節ゆえ貴殿の申す通り早晩のも尽きるであろうな」

俺は斥候からの情報で知っている、この城の兵糧が既に尽きかけているのを。本来1千程の兵が常駐している程度の城に4千の兵が居るのだ、兵糧の減りも早まるというもの。

更に今は春であり、米の収穫と徴収まで半年ある。とてもこの城に半年持たせるだけの米は無い。

「また当方は上野、武蔵、駿河、遠江からも兵を繰り出しており、甲斐が落ちるのも時間の問題かと」

「左様か。しかしだからと言って開城せねばならぬ謂れは無いと思うが？」

上野と遠江は降したが未だに武蔵と駿河では一進一退を続けているため、俺は少し誇張して申し出たのだが信実殿には通じなかったか？ いや信濃からこれまで我等との戦に忙殺されてきたのだ。

他方面の近況を知っているはずは無い、もう少し押せば落ちるはずだ。

「否、最早武田の終焉が差し迫っているのですぞ。であれば一刻も早く当主信勝殿、陣代勝頼殿をお諫めして家を保つ道を探るのが忠臣というものではないでしょうか？」

「……」

「上杉の例もあります。もし信実殿が信勝殿と勝頼殿を説得して頂けるのであれば、それがしの命に代えて武田の名を救います」

「……」

「信実殿っ！」

「……そなた一人の命で武田が本当に守れるものか？」

「守ります！ それがしは此度の戦の総大将を我が父より仰せつかっております。滅ぼすも救うもそれがしの裁量一つ！ 武田が臣従し織田の敵でなくなるのであれば、我が父にも文句は言わせませぬ！」

「一つ聞きたい。何故そなたは武田を助ける？」

「早く戦を終わらせる為にござる。早く終わればその分だけ家に帰れます、それはそれがしだけでなく皆が同じ事。そしてもし戦が長引けば、それだけ命を落とす者が出ると言う事でもあるかと」

「……成程、よう判った。勝長殿、躑躅ヶ崎館まで御同行願えるかな？」

「はっ」

ふと見れば周りの諸将がハラハラと涙を流していた。

城外の織田の陣に駒井政直と戻り、とりあえず政直を人質にする代わりに陣を下げて城の包囲を解かせた。

武田家当主の信勝殿を説得出来れば良いが……、昔相撲していて泣かした事を根に持ってなければ良いが…。

第二十六話 信濃の苦渋、勇往邁進（その3）（後書き）

此処だけの話、次話では親子喧嘩しますが上手く書けてませんので
ご容赦下さい。

……ホントに此処だけの話ですよ。

第二十七話 駿河の平穩（明鏡止水）（その1）

■天正11年（1583年） 5月

「御坊、武田を滅ぼせつ！ 信勝と勝頼の首を持って参れ！」
「出来ません」

俺は今、安土の天主で親父様に対面している。理由は武田攻めの戦後報告の為だ。結論から言うと武田は生き残った。

河窪信実との会談後、直ぐに躑躅ヶ崎館で武田家当主の信勝と陣代の勝頼殿を始めとする甲斐のお歴々に降伏の勧告をした。勿論、此処でも喧々諤々、非難轟々、罵詈雑言を浴びたが最終的には信勝の説得もあり受け入れられた。

その後は大至急で俺は各地で戦っている別働隊に“武田が降伏した”という旨の文を送り、同時に武田家からも同様の文を各地で奮戦している諸将に送って貰った。

そしてその場で“甲斐・信濃・駿河は武田の領地として認め、遠江・上野・武蔵は織田が貰う事”“織田と武田の間にあった関所は撤廃する事”“降伏の証として今後も義春を人質として織田に置く事”等々の諸事を親父様の承諾を得ずに決めてしまった。因みに遠江には滝川一益、上野には上杉家、武蔵には柴田勝家にとりあえず入って貰った。

そんな訳で今、俺は親父様と人生初の親子喧嘩をしているのである。

「ええい、儂は認めんぞ！」

「認めぬも何も、それがしを総大将に認めたのは上様に御座います。なれば生殺与奪はそれがしに一任されたものでござる。既に決まっ

た事を覆しては織田家の真意が問われますぞ」

「では、そなたの倅に武田の家督を継がせよ！」

「それがしの大事な跡取り息子を武田に渡す訳には参りませぬ」

「…ならば、そなたの所に置いておいた五徳の娘を武田に嫁がせよ！」

「それこそ話になりませぬ」

「……そなた本気で申しておるのか？」

「本気で御座いまするが…何か？」

あつ、親父様の目が座つた、地雷踏んじやつた？ でも此処は引けぬのですよ。

「よお判つた。武田の件はもう良い」

「…はっ」

「御坊、昨今の働きご苦労であつた。武田攻めの総大将の任を解く。更に東海筋に関する一切の責務からそなたを解く、何処へなりとも好きに行くが良い」

「…はっ（感動…ゴホン勘当つて事ですか？）」

俺、また家を追い出されちゃった。いいもん、今度は家族が一緒だから寂しくないやい！

……でも茶々に何て言おうか、付いて来てくれるかな？ 督共々で身重の体だから余り煩わせたくないな。

■天正11年（1583年） 5月

結論、『女つて強えゝな』

家に帰って“怒られるかな”と思いながら茶々と督に

「親父に勘当された。城を出て織田の領外で暮らす事になった」
って言ったら

「そうですか、それでは引越しの準備をせねばならなませぬ。邪魔ですから夕餉まで子供達を外に連れて行って下さいませ」

ってケロっとして言い放たれてしまった。よくよく聞いてみると茶々曰く、

「飛騨も美濃も、それに生まれた時は近江も初めての土地でした。織田の領外だからといっても、殿が居れば不安はありません」

そして督曰く、

「興入れた時から殿の傍が督の家です」

って言われちゃって何かホクホクした気分になってきた。

そんな訳で子供達を城外に連れ出して遊ばせておいて、俺はその風景を見守りながら家臣にこれからの事を伝えている。

「於義丸（おぎまる）は一益に預けよ、あの者には悪いが上手く遣ってくれるだろう」

「はっ…しかし殿、何も城外でこのような事をせずとも良いのではないでしょうか」

「まあそう言っな、たまには青空の下で行なうのも良からう」

「…はあ」

「次に千熊丸だが、阿波・讃岐を監督している丹羽長秀に任せよ。

長宗我部も千熊丸が土佐の近くに居ればこれまで以上に安心するであらう」

「はっ」

「あと義春じゃが、織田本家に連れて行け。御内様（松姫）も武田の者が近くに居れば話相手に不自由はせぬであらう」

「はっ」

「最後に東海筋の諸事については本家に帰す事になったから、これからは兄上様（信忠）の下知に従うように」

「ははっ」

そんな硬い話を大人たちがしている横で、子供達は元気に遊んでいる。

「義父上様、登久と一緒にオママゴトして下さい」

「義父上様、熊と一緒にかくれんぼして下さい」

■天正11年（1583年） 5月

「今日から此処が我が家だ」

「はい」

俺の宣言に茶々、督、登久と熊、そして言葉を覚え始めた源三郎が応える。

俺達家族は織田の領地を離れ、武田領の駿河に腰を落ち着かせた。細かい事を言えば此処も既に織田の領地なのだが、まあ細かい事は気にしない。

生活資金についてはこれまでの織田家での『庶務に対する報酬』という蓄えがあるため問題無い。食についても、この駿河は北に富士の幸、南に駿河湾の海の幸が豊富で食い飽きる心配も無い。問題は…

「勝長あゝ、遊びに来たぞ」

「……（また来た）」

そうです、この陽気な声で俺の許し無しに敷居を跨いできた男は駿河郡代に抜擢された武藤昌幸について来た悪友の信幸です。

「はあ、信幸、そなたの仕事はどうしたのだ。まさか親父殿や家臣に無断で来たのではあるまいな」

「なんだそのデカイ溜息は？ 俺だって暇じゃないんだ！ ちゃんと仕事を終えてから家臣に断って来ているぞ」

「……まだ昼前だぞ、“俺だって暇じゃない”ってこれで三日連続ではないか！それに駿河郡代のご子息は少しの仕事しか与えて貰えないでは情けないぞ」

「何を言う！ テキパキとこなしているだけだ、決して仕事が少ない訳ではないぞ！」

「……そうか、で今日は何の用だい？」

「公にはお主の監視じゃ！ 本音は昼飯を馳走してもらいに参った」
「……何とも身も蓋も無いな、そもそもそなたの家は隣ではないか」
「全くだ、はははっ」

そう、この信幸は何をトチ狂ったのか俺の家の横に引っ越してきやがった。

“駿河郡代の息子がこれで良いのか、ちゃんと城で暮らせよ”と頭を抱えなくなったが信幸曰く、

「家督は弟の源二郎が継ぐ事にしたから問題無い」

って豪語した。勿論俺は、

「そなたは嫡男であろう？ そなたが継がぬでどうする？」

と翻意を促したのだが、

「源二郎の方がウチの親父と話が合うみたいでな、親父に言わせるとうやうやら俺は頭が固いらしい。それ故武藤家の次期当主は源二郎という事になった、はははっ」

……お前、頭が固いつてどの口が言う！ 少なくとも笑いながら話す事じゃないだろう、お前も嫁とじっくり話し合え！

■天正11年（1583年）11月

駿河に来て半年、概ね生活は良好だ。俺は近所の童達に読み書きを教える傍ら、暇な時は海に行つて釣りをする毎日を送っている。チ

ヨツと早いが悠々自適の隠居生活という訳だ。

茶々と督も無事に出産し、茶々が男児（源四郎と命名）を督が女児（甲姫と命名）を元気に育てている。

そして今日も…というか毎日、茶々と督はご近所さんで信幸の嫁の凧殿と話し込んでいる。

「今日の茶々殿のお着物はお綺麗ですね」

「これですか、これは昔着ていた着物を何着か裁断して縫い合わせたものです」

「へー、もし宜しければ今度私にも同様の物を縫って頂けませぬか？　どうも私は裁縫が不得手のようで…」

「良いですよ凧殿、好きな布キレさえお渡し頂ければ喜んで遣らせて頂きます」

「あつ茶々様、私も一緒にしても宜しいですか、娘（甲姫）の産着を作りたいのです」

「構いませんよ、督殿」

今月の格言『触らぬ神に祟り無し、女子の会話を邪魔するな！』

第二十八話 駿河の平穩と明鏡止水（その2）

■天正11年（1583年）12月

武田家というか信幸からの情報によつて、各地の情勢が伝わってきた。

まず中国だが、織田と毛利が和睦というか、毛利が織田に臣従したようだ。臣従の条件としては、領地は石見・周防・長門・安芸の四カ国とし出雲と備州から手を引く事、人質を出す事、織田の九州攻めに参加する事等々となつたようだ。

毛利にしてみれば山陰と山陽の両面から攻められ、更に四国からも攻撃されそうになつていたからこの辺りが限界だろう。また領地にしても四カ国あれば何とか家として運営出来るだけは残つたと言えよう。

次に九州だが龍造寺と大友が抑えられ、島津が台頭し始めているようだ。何分遠国の情報の為、武田家でも“遙か遠くの出来事”程度の情報しか持つていないようだ。

史実通りと言えるか判らないが、このまま島津の九州統一が進むようなら、統一の直前か直後には織田の九州攻めが行なわれる事だろう。

今度は東国についてだが、まず北条家と織田との和睦・臣従の話が進んでいるようだ。北条は北と西を武田に東を織田に抑えられている状況にあり、“徳川の二の舞は御免だ”と言う事だろうが早々に臣従の道を選んだようだ。ただ、前当主の北条氏政がこの期に及んで渋っているらしく。条件面で難航しているらしい。

その他の関東勢でいうと、つい先日まで武田と共に北条を攻めていた佐竹と里見の両家も、武田家に仲介を頼んで織田と誼を通じようと動いているようだ。流石に大国にまでのし上がっていた武田があつさりと織田に敗れた所を目の当たりにすれば当然の行動だろう。あと、宇都宮家を中心とした下野の豪族たちは何やら陸奥の諸家との連帯を図っているようで、この辺りから戦の臭いがしている今日この頃である。

最後に陸奥・出羽についてだが、陸奥は“打倒織田、織田から奥州を守れ”の合言葉によって紐帯を強めている。この辺りの家々には元々あの伊達植宗の婚姻外交の乱発により血の繋がりがあつたため、目的さえ共有出来れば連携はそれ程難しくは無いのだろう。そして出羽については、背後と脇腹の心配が無くなった上杉が最上と芦名を攻め始めており、これを脅威に思つた諸豪族がここでも“上杉を羽州に入れるな”の旗の下に連帯を強めているようだ。

ウチの縁側で信幸と茶を啜りながら、今後の情勢について聞いてみた。

「なあ信幸、このままだと概ね織田が天下を統一しそうだが、そなたはどう見る？」

「そうだな、九州については幾ら島津が台頭しても織田が抑えるだろうけど、奥羽については諸家の連携次第ではどうなるか判らないな」

「うゝん、何か織田と上杉に対する敵対心が強まっているみたいだけど、大人しく矛を収める事は難しいか。やはり奥羽では一戦ありそうだね」

「…ウチの親父も同じ事を言っていたよ」

「成程、流石は“信玄公の目”と言われただけはあるね」

「ふん、俺の考えで無くて悪かったな」

「…何を怒っているんだ？」

「何でも無い。このところ親父に暮で連敗しててな、どうも俺は愚直過ぎるらしい。それを言われて少し落ち込んでいるだけだ」

「はははっ、そなたも親父には苦労しているようだな」

「全くだ、俺もそなたのように早く楽隠居したいよ」

■天正12年（1584年） 1月

新年早々、俺は武田家に呼ばれ甲斐府中を訪れている。理由は良く判らない、信幸も“丁重にお連れしろ”と言われているだけで判らないと首を傾げていた程だ。

用件が不明なまま、武田家の家臣の方々に連れられて躑躅ヶ崎館の当主の間に赴くと、其処には当主の信勝を始め重臣一同のお歴々が勢揃いしていた。

何か異様な空気の中、とりあえず下座に俺が座るとおもむるに上座から信勝が話し掛けてきた。

「勝長殿、遙々この甲斐までお越し頂きかたじけない。本日お越し頂いたのは他でもない貴殿が織田家を離れた理由、そして駿河で暮らしている訳を知りたいのです」

「…はあ（理由が知りたいって、何でこんな大勢集まってるんだ？あと昔からの知り合いである信勝に“貴殿”なんて言われると背中がムズムズする）」

俺がまだ要領を得ていないと読み取ったのか、重臣主席の席（俺の真横）に座っている勝頼殿が補足して説明し出した。

「当家は昨年、織田家に臣従する道を選んだ。またそなたのお陰で武田の血を絶やすことなく家を守れたとも聞いておる」

「…はい」

「ただその所為で、そなたが信長殿…ゴホン上様に疎まれたとも聞いておる」

「はい、見事に勘当されました」

「…ふむ、しかし見方を変えれば異なる物を見る者が出てくる」

「と言いますと？（何か少しずつ見えてきた）」

「未だ信の置けぬ武田を監視するためにそなたが武田領内に潜入した、との見方じゃ」

「成程、で本日それがしを呼んで真意を聞き出そうという訳ですか。そして信幸がそれがしを監視していた訳も何となく判ってきました」

「そうだ、…そなたが織田に戻ってから活躍を見れば、幾ら上様が一時の癪癢を起こしたとしても手放すとは考えられぬ故な」

「…」

「忌憚なく話してはくれぬか？ 当方としても臣として信頼されておらぬとなれば存分に織田家の為に働けぬのじゃ」

「どうやら武田家家中では俺の事で織田に対して疑心暗鬼となつていゝるみたいだ。」

俺としては既に織田を離れた身だから織田がどうなろうと知った事ではない。しかし折角親父様と喧嘩してまで武田を残そうと思つたのだから、武田が疑心暗鬼の末に織田に反旗を翻して結局取り潰されては元も子もない。

此処はしっかり説明して武田家家中の疑念を振り払つておくとしよう。

「先程も申しましたが、本当に上様…ゴホン、ウチの親父様に織田家での総ての職を解かれ“何処へなりとも好きに行くが良い”と勘当されました」

「…誠か？」

「はい」

「だが当家にまでそなたの活躍は聞こえてきた位であるから…上様がそなたの力量を無下に捨てるとは思えぬ」

「ん、何をもって“それがしの活躍”と申されているか存じませぬが、それがしが織田に戻ってから活躍の殆どは織田の家臣達の働きですよ、政事も飛驒・越中攻めも…」

「上杉を臣従させた事は？ 彼の家は織田に臣従するにあたって、そなたを頼ったと聞いておるが？」

「頼られた覚えはありませんよ、そもそも武田家が仲介した際に“当家と誼のある勝長を頼られては如何か”と言われたと聞いてます。それに上杉には越中攻めを手伝って貰った礼に越後の平定を織田が助けただけです」

「ふむ…、では上様危篤の際にそなたが活躍したと聞いておる件はどう説明する？」

「あの時はただ幾つかの織田家家臣へ文を出しただけで、実際に織田領を守ったのも東海筋の家臣達です」

「…徳川を討ち返した際には総大将であつたはずだが？」

「名ばかりの総大将です。実際に策を巡らしたのは叔父達であり、策の通りに動いたのは多くの兵達です」

「昨年当家へ攻めて参つた際には全軍の総大将だつた件は？」

「それについても同様です、上野・遠江・駿河方面の別働隊については戦中は何も下知を出してませんし、信濃方面についても美濃・飛騨の諸將の働きによるものです」

「…内政についても目覚しい働きがあつたと聞こえてきたが？」

「それこそ飛騨、美濃の家臣の働きが総てです。それがしは上がった提案や決済の書類の裁決をしていただけに御座います」

「ふう、よくよく考えると俺って織田家に居たとき何やってたんだろ？ 家臣の皆さんには改めて“有難う”って言いたくなってきた。今度親父に判らないように御礼の文でもだそうかな。」

「…よう判つた。噂とはいいい加減な物だという事がな」

「はっ、…それがしが武田の領内に住むことで家中の皆さんには大変不愉快な思いをさせていたようで、誠に申し訳なく存じます」

「やっと納得してくれたか、はあ、疲れた…、と思つていると今度は別の件でここまで黙つて聞いていた信勝が話し掛けてきた。」

「な、なんと今度は何をトチ狂つたか俺を召抱えるって言つてきた。」

「まあ家中一同の溜飲が下った故にそれは良いのだが…、勝長殿、貴殿は武田家のために働く気はお有りか？」

「辞めといった方が宜しいかと。まだ織田に臣従して日の浅い武田が上様に楯突いたばかりのそれがしを召抱えては何かと面倒になります故」

「左様ですか…、また共に武田の旗の下で歩を揃えられると思ったのだが残念ですね」

信勝の落胆振りからして本当に誘ってきたようだが、今はお断りです。折角家族と水入らずでの生活を満喫しているのに邪魔しないで欲しいものだ…。

■天正12年（1584年） 1月

駿河で初めての冬を迎えた訳だが、関東から東海に掛けては乾燥した風が強く吹き付ける所為か肌を刺すような痛さを覚える。俺も歳かな。

そんな訳で家の中に居る事が多いのだが…、

「今帰ったぞ〜！」

勝手に我が家に入ってきたのは、相変わらず悪友の信幸だ。

「はあ、そなた一体何度言えば判る！ そなたの家は隣だ、勝手に我が家の敷居を跨ぐな」

「そう言うな、俺とそなたの仲ではないか、はははっ」

笑いながら自然体で草履を脱いでいやがる信幸に心の底から怒りが湧き上がってきた。

「何を勝手に居間にながろうとしておる！ 我が家の家族団らんの場合を荒らすでない」

「…折角急いで甲斐から戻ってきての一月振りの対面ではないか。」

もう少し暖かく迎えてくれぬか？」

「出来ぬ！　そもそもそなたの顔は見飽きた、帰れ！」

「…連れないの、ウチの女房と同じ事を言わんでくれ。女房は本家からの輿入れで、更に俺は家督を継がぬ事になった故にウチでは肩身が狭いのじゃ！」

大の大人が泣き真似なんぞするな、新年早々に気色悪い事この上無い！

「そなたの家の事などどうでも良い！　早よう帰れ」

この後、雑炊を三杯も平らげてから俺に尻を蹴り飛ばされて勝長邸から追い出される武藤家嫡男が幾人かに目撃された。

そして「貴様なんぞは、カラッ風に乘って伊豆の岬まで飛んでいてしまえ！」という罵声が駿河府中に響いたとか響かなかったとか…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9219w/>

五男？……四男じゃなかったっけ？

2011年10月30日16時07分発行